

北斗市

# 矢不來 8 遺跡 (2)・矢不來10遺跡

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



北斗市

# 矢不來 8 遺跡 (2)・矢不來10遺跡

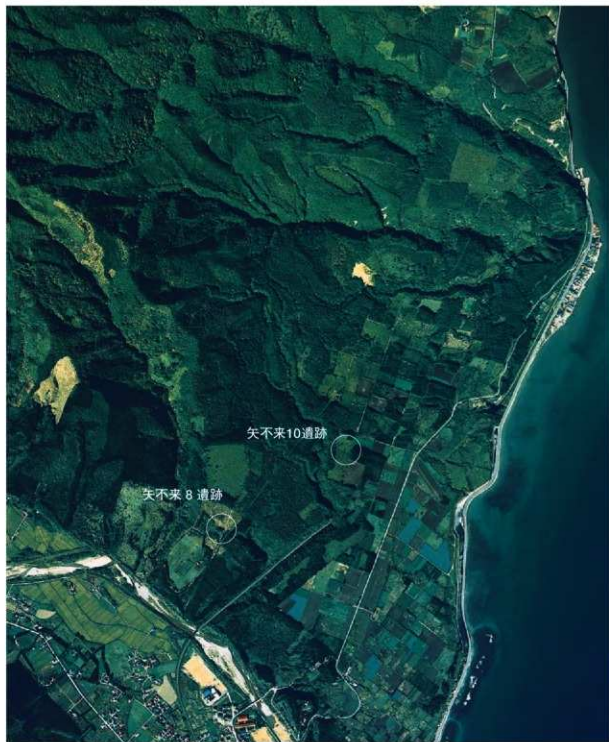
高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







遺跡周辺の空中写真

カラー図版 2

矢不來 8 遺跡



1 H 2 覆土

北西から



2 H 2 HP 1 覆土 西から



3 SP14 覆土 西から



4 SP15 覆土 北から



5 F 5 南西から



1 凍上現象 (Q-17区)

西から



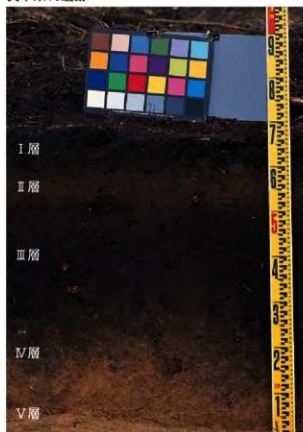
2 基本層序VI・VII層 (U-17区) 西から



3 赤色顔料付着遺物

カラー図版 4

矢不來10遺跡



1 基本層序 I～V層 (H-36区) 南東から



2 CS 1 南東から



3 CF 1 南東から



4 基本層序 V層以下 (S-43区) 北から



5 TP 1 覆土 北東から

## 例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が行う、高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成18年度に実施した、北斗市矢不來 8 遺跡・矢不來10遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 矢不來 8 遺跡の地番は、北海道北斗市矢不來437 - 3 ほか、矢不來10遺跡が北海道北斗市矢不來234ほかである。
3. 調査は第2調査部第2調査課が担当した。
4. 本書の執筆は、佐川俊一、中山昭大、山中文雄が行い、編集は山中文雄が担当した。文責者については、文末に（ ）で氏名を記してある。
5. 遺物の整理は山中文雄が担当した。
6. 石器類の石質鑑定は、第1調査部第1調査課花岡正光、第2調査部第4調査課越田雅司の指導を受けた。
7. 現地調査での写真撮影は各担当者が、室内での写真撮影・整理は、中山昭大が担当した。
8. 調査報告終了後の出土遺物は、北斗市教育委員会で保管される予定である。
9. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた（順不同、敬称略）。  
北海道教育委員会、北斗市教育委員会 三上順之 森 靖裕、北海道電力株式会社函館統括電力センター、加藤組土建株式会社、近藤建設株式会社、岩井正嘉、野辺地初雄、三上英則、横山英介

## 記号等の説明

1. 遺構名に用いた記号は以下のとおりである。

H：竪穴住居跡 P：土坑 F：焼土 BP：埋設土器・土器埋設炉 SP：柱穴様の小土坑  
竪穴住居跡の付属遺構にはHを付した。

HF：地床炉 HP：柱穴等

遺物の集中地点は遺構に準ずる扱いとし、以下の記号を付した。

CP：土器破片集中 CF：フレイク・チップ集中 CS：礫集中

2. 土層の表記については、自然層位をローマ数字で、遺構の層位をアラビア数字で示した。  
3. 土色の判定には、『新版 標準土色帖』2004年版（小山・竹原 1967）を用いた。  
4. テフラについて、以下の略号を用いたところがある。

Ko-d：駒ヶ岳dテフラ B-Tm：白頭山苫小牧テフラ

5. 実測図・拓影図の縮尺は原則として以下のとおりで、スケールを付してある。

遺構 1：40（CP1、CS1の平面図は1：20）

土器 1：3 剥片石器・磨製石器 1：2 礫石器 1：3

土製品・石製品・金属製品 1：2

6. 挿図中の方位は真北を示す。

7. 本文中の遺構の規模（遺物集中の場合は範囲）は、次の要領で示した。なお、一部が失われているものなどは、現存長を（ ）を付して示した。

竪穴住居跡・Tピット 「確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/最大深」（単位：m）

焼土 「確認面の長径×短径/最大厚」（単位：m）

遺物集中 「遺物の広がり/長径×短径」（単位：m）

8. 遺物の計測値で、推定値の場合や欠損部分がある場合は（ ）を付して示した。

9. 石器の実測図に付した記号で、|—|は微細剝離痕、|←→|はすり痕、V-Vは敲打痕を表す。  
10. カラー図版1で使用した空中写真は、国土地理院撮影の「CHO-76-18」（1976年撮影）である。  
11. 挿図で使用した地図は、図I-1が国土地理院発行の20万分の1地勢図「函館」（平成5年発行）・2万5千分の1地形図「茂辺地」（平成15年発行）、図II-1が同院発行の5万分の1地形図「函館」（平成3年発行）である。  
12. 本文中の文献のうち、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書は、「(北理調報244)」のように、略称とシリーズ番号を組み合わせて表している。

# 目 次

カラー図版

例 言

記号等の説明

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

## I 調査の概要

- |               |   |
|---------------|---|
| 1 調査要項        | 1 |
| 2 調査体制        | 1 |
| 3 調査に至る経緯     | 1 |
| 4 調査結果の概要     | 3 |
| (1) 矢不來 8 遺跡  |   |
| (2) 矢不來 10 遺跡 |   |

## II 遺跡の位置と環境

- |               |   |
|---------------|---|
| 1 地理的環境       | 7 |
| 2 歴史的環境と周辺の遺跡 | 7 |

## III 調査の方法

- |               |    |
|---------------|----|
| 1 発掘調査の方法     | 11 |
| (1) グリッドの設定   |    |
| (2) 基本層序      |    |
| (3) 発掘調査の方法   |    |
| 2 遺物整理の方法     | 15 |
| (1) 遺物整理の方法   |    |
| (2) 土器類の分類    |    |
| (3) 石器類の分類    |    |
| (4) 遺物・記録類の保管 |    |

## IV 矢不來 8 遺跡

- |             |    |
|-------------|----|
| 1 遺構とその出土遺物 | 17 |
| (1) 竪穴住居跡   |    |
| (2) 焼 土     |    |
| (3) 柱穴様の小土坑 |    |

2 包含層出土の遺物 .....	21
(1) 土器類	
(2) 石器類	
<b>V 矢不來10遺跡</b>	
1 遺構とその出土遺物 .....	43
(1) Tピット	
(2) 土器破片集中	
(3) フレイク・チップ集中	
(4) 礫集中	
2 包含層出土の遺物 .....	47
(1) 土器類	
(2) 石器類	
(3) 金属製品	
<b>VI 総括</b>	
1 矢不來8遺跡 .....	65
2 矢不來10遺跡 .....	66

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録





## 図版目次

### カラー図版

図版1 遺跡周辺の空中写真

### 矢不來8遺跡

図版2-1 H2覆土

2-2 H2HP1覆土

2-3 SP14覆土

2-4 SP15覆土

2-5 F5

図版3-1 凍上現象 (Q-17区)

3-2 基本層序Ⅵ・Ⅶ層 (U-17区)

3-3 赤色顔料付着遺物

### 矢不來10遺跡

図版4-1 基本層序Ⅰ～Ⅴ層 (H-36区)

4-2 CS1

4-3 CF1

4-4 基本層序Ⅴ層以下 (S-43区)

4-5 TP1覆土

### モノクロ図版

### 矢不來8遺跡

図版1-1 調査開始面

1-2 H2覆土

図版2-1 H2炭化木片出土状況

2-2 H2完掘

2-3 H2HP1覆土

2-4 SP14覆土

図版3-1 H2出土の遺物

3-2 SP15覆土

3-3 遺物出土状況 (Q-16区)

3-4 遺物出土状況 (T-17区)

図版4-1 調査終了面 (道路以北)

4-2 調査終了面 (道路以南)

図版5 包含層出土の土器 (1)

図版6 包含層出土の土器 (2)

図版7 包含層出土の土器 (3)

図版8 包含層出土の土器 (4)

図版9 包含層出土の土器 (5)

図版10-1 包含層出土の土器 (6)

10-2 包含層出土の石器 (1)

図版11 包含層出土の石器 (2)

### 矢不來10遺跡

図版12-1 調査開始面 (中央地区南側)

12-2 調査開始面 (中央地区北側)

図版13-1 調査開始面 (東地区北側)

13-2 TP1覆土

13-3 TP1完掘

図版14-1 CP1

14-2 CS1 (1)

14-3 CS1 (2)

14-4 発掘作業状況 (I層)

14-5 調査開始面 (遺構確認調査区)

図版15-1 調査終了面 (遺構確認調査区)

15-2 調査終了面 (西地区)

図版16-1 CP1出土の遺物

16-2 CF1出土の遺物 (1)

16-3 金属製品

16-4 CF1出土の遺物 (2)

16-5 CS1出土の遺物

図版17 包含層出土の土器

図版18 包含層出土の石器 (1)

図版19 包含層出土の石器 (2)・金属製品

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

受託期間：平成18年4月3日～平成19年3月31日

遺跡名	北海道教育委員会 登録番号	所在地	調査面積	調査期間	整理期間
矢不來8遺跡	B-06-74	北斗市矢不來437-3ほか	82㎡	平成18年10月3日～ 10月27日	平成18年11月1日～ 平成19年3月31日
矢不來10遺跡	B-06-76	北斗市矢不來234ほか	7,607㎡	平成18年7月10日～ 10月27日	平成18年11月1日～ 平成19年3月31日

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重 樞一

専務理事 宮崎 勝（平成18年4月30日まで）

常務理事 佐藤 俊和（平成18年5月26日から専務理事を兼務）

第2調査部長 西田 茂

第2調査課2課課長 佐川 俊一（矢不來8遺跡・矢不來10遺跡発掘担当者）

主任 中山 昭大（矢不來10遺跡発掘担当者）

主任 山中 文雄（矢不來8遺跡・矢不來10遺跡発掘担当者）

## 3 調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差自動車道」は、函館市を起点とし北斗市・木古内町を經由、江差町に至る延長約70kmの一般国道自動車専用道路として北海道開発局により整備が進められている。この道路は北海道縦貫自動車道・函館新道と接続、函館都市圏の新たな環状道路として地域の交通混雑の解消、地域経済の活性化のために計画されたものである。

現在、事業区間となっている函館1Cから木古内1C（仮称）までは、函館茂辺地道路（延長18.0km）と茂辺地木古内道路（延長16.0km）に分けて事業が進められている。前者では、平成15年3月に函館1C－上磯1C間の約8kmが暫定供用され、現在上磯1Cから茂辺地1C（仮称）間の用地買収と道路工事が進められている。また後者では、設計協議・用地買収等が進められている。

高規格幹線道路（上磯1C－茂辺地1C間）にかかわる埋蔵文化財調査の経緯は以下のとおりである。

平成6年4月、函館開発建設部（以下、「函館開建」という）は、函館江差自動車道にかかる埋蔵文化財保護のための事前協議書を北海道教育委員会（以下、「道教委」という）に提出した。これを受けて道教委は、同年同月に遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、次の9か所において遺跡の範囲確認調査が必要と判断された。遺跡は北から押上1・館野・館野4・館野2・館野6遺跡、矢不來館跡、矢不來台場跡、矢不來6・矢不來7遺跡である。その後、平成13年7月、函館開建により道路の工法変更がなされ矢不來館跡、矢不來台場跡の2か所について保存が決定、調査の必要な箇所は7か



図 I - 1 遺跡の位置

所となった。その後、試掘調査の結果によって矢不來 6 遺跡と呼ばれていた範囲は矢不來 6・10・11・12遺跡の 4 遺跡に、また矢不來 7 遺跡と呼ばれていた範囲は矢不來 7・8・9 遺跡の 3 遺跡に分けられた。このため工事に伴い発掘調査が必要な遺跡数は最終的に12か所であることが平成15年12月、道教委から函館開建へ通知された。

矢不來10遺跡にかかる道教委の範囲確認調査は、矢不來 6 遺跡、矢不來11遺跡とともに平成15年11月に実施された。このうち矢不來10遺跡は、旧国道から西へ分岐する町道の南西側において幅60m、長さ260mが調査範囲である。調査の結果、町道寄りの畑地では表土から遺物が出土するが、遺物包含層としての土層状態は不良であった。畑地よりも南西側の山林部分は遺物包含層が良好に存在し、土器・剝片・すり石等が出土した。この結果をもとに道教委は、土層状態が良好な山林部分を発掘調査、土層の不良な畑地部分のうち遺物が出土した範囲について遺構確認調査が必要と判断した。

一方、矢不來 8 遺跡は発掘調査が必要と判断された範囲のほとんどについて平成17年度に調査が終了した。しかし、その範囲のごく一部に函館から渡島当別までの高圧線が架設されていたため、同年度に調査をすることができなかった。この高圧線の架け替え工事が平成18年9月下旬に行われたので、その工事完了後に発掘調査を実施した。なお、道教委による矢不來 8 遺跡の範囲確認調査の経過については、「矢不來 7 遺跡・矢不來 8 遺跡」(北理調報232)のなかで記述したので、ここでは省略する。

平成18年度の発掘調査は7月から10月まで約4か月間の予定で、矢不來10遺跡の発掘調査部分(6,326㎡)を対象に調査を開始した。その後、8月末に矢不來10遺跡の遺構確認部分の用地買収が終了したことと矢不來 8 遺跡の高圧線架け替え工事と電柱の撤去日程が具体化した。9月、函館開発建設部から道教委を通じてこの2か所について発掘調査追加の要望があった。この件についてセンター内部で検討した結果、矢不來10遺跡の遺構・遺物の出土状況が当初よりも少ないことから、これらの調査を取り込むことが可能と判断し、9月下旬から発掘に着手した。(佐川俊一)

## 4 調査結果の概要

### (1) 矢不來 8 遺跡

矢不來 8 遺跡は、茂辺地川の河口から北北西へ約1.4km、海岸段丘上の標高60m付近に位置する。平成17年度には6,196㎡が調査されており、調査区の南側では縄文時代中期後半から後期前葉、東側では晩期中葉の遺構・遺物が検出されている。今回行われた調査は、高規格道路工事に伴う高圧線の電柱移設により発掘可能となった部分である。土層は、Ⅰ層：黒褐色の表土および耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：白頭山苦小牧テフラの混じる暗褐色土、Ⅳ層：黒褐色土、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：褐色土、Ⅶ層：浅黄色の重埴土である。

遺構は、竪穴住居跡1軒(H2)、焼土1か所(F5)、柱穴様の小土坑3か所(SP14~16)が検出されている。H2は調査区外にその大半がのびており、住居跡北側の一部についての調査である。

遺物点数は土器類7,556点、石器類1,010点を数える。土器は縄文時代後期前葉のものがほとんどで、わずかに中期、晩期のものがある。石器は石鏃、石錐、磨製石斧、たたき石、すり石等があるが、特にスクレイパーが多い。

なお平成17年度には、竪穴住居跡1軒(H1)、土坑10基(P1~10)、埋設土器1基(BP1)、土器埋設炉1か所(BP2)、焼土4か所(F1~4)、柱穴様の小土坑13か所(SP1~13)、土器破片集中1か所(CP1)、礫集中1か所(CS1)が調査されており、土器類4,994点、石器類638点が得られている(北理調報232)。

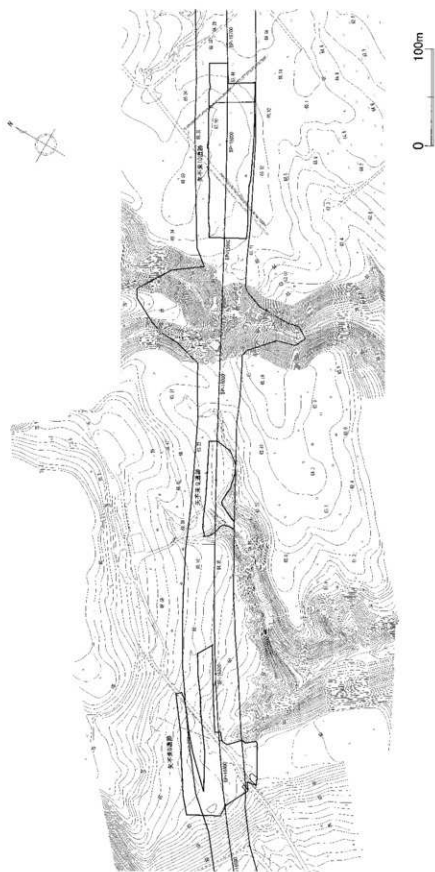


图 1 - 2 道路周边现状图

## (2) 矢不來10遺跡

矢不來10遺跡は、茂辺地川の河口から北へ約1.5km、海岸段丘上の標高65m付近に位置する。土層は、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：白頭山苦小牧テフラの混じる暗褐色土、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：褐色土である。

遺構はTピット1基（TP1）が検出されている。標高約67mの、調査区内では比較的高い部分にある。形態は長径約2.7mの溝状で、底面に杭痕等は見られない。この他、遺物の集中地点として、土器破片集中（CP1）、フレイク・チップ集中（CF1）、礫集中（CS1）がある。CP1は縄文時代後期中葉のものである。CF1は頁岩のフレイク・チップ等222点のまとまりで、縄文時代早期後半の可能性が高い。CS1は小礫等583点のまとまりで、時期は不明である。

遺物点数は土器類1,061点、石器類1,595点を数える。土器は縄文時代早期後半、後期前葉、晩期後葉のものが比較的多い。石器は石鏃、石錐、石匙、石筥、スクレイパー、磨製石斧、たたき石、すり石、台石、石皿等がある。上述のCF1からは、フレイク・チップに混じって石匙が出土している。この他、箱館戦争時のものとみられる鉛製の銃弾7点がある。

(山中文雄)

表I-1 遺構数一覧

遺跡名\遺構種類	竪穴 住居跡	土坑	T ピット	焼土	埋設 土器	土器 埋設炉	土器破 片集中	フレイク ・チップ 集中	礫集中	柱穴様 小土坑
矢不來8 (平成17年度)	1	10		4	1	1	1		1	13
矢不來8 (平成18年度)	1			1						3
矢不來8 (合計)	2	10		5	1	1	1		1	16
矢不來10 (平成18年度)			1				1	1	1	

表I-2 遺物点数一覧

調査年度	遺跡名 \出土 地点	土器類											石器類					金属 製品	合計	
		I群	II群	III群	IV群	V・ V群	V群	V・ V群	VI群	未分類	土製品	小片	刮片 石器類	磨製 石器類	礫 石器類	石製品	礫			小片
平成17	遺構			108	155		336		116	47		822	26	1	20	32	79		901	
	包含層		20	44	1,815		2,161		1	131	4	4,176	465	3	38	1	48	555	4,731	
	合計		20	212	1,970		2,497		117	178	4	4,998	491	4	58	1	80	634	5,632	
平成18	遺構				6							6	8		1		9		15	
	包含層			6	7,347		120			74	3	7,550	710	8	36		247	1,001	8,551	
	合計			6	7,353		120			74	3	7,556	718	8	37		247	1,010	8,566	
合計(2小年度分)			20	218	9,323		2,617		117	252	7	12,554	1,209	12	95	1	327	1,644	14,198	
平成18	遺構	1			52							53	220			584	804		857	
	包含層	160	26	9	443	24	119	68		157	2	1,008	692	28	23		48	791	7	1,806
	合計	161	26	9	495	24	119	68		157	2	1,061	912	28	23		632	1,595	7	2,663





## Ⅱ 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

遺跡の所在する旧上磯町（現北斗市南部）は、北海道の南西部渡島地方の南部中央に位置する。南西は上磯郡木古内町、北西は輪田郡厚沢部町、北は旧亀田郡大野町（現北斗市北部）、東は同郡七飯町・函館市に接し、東南は函館湾、津軽海峡に面する。北部から西部に山地が連なり、厚沢部町・木古内町との境界は、標高約700m前後の山々が分水嶺となっている。旧上磯町内の主な河川としては、旧町域の北西側から久根別川・大野川・戸切地川・宗山川・流溪川・茂辺地川・大当別川等が函館湾に注いでいる。年間の平均気温は摂氏9.1度（平成11年）であり、北海道では温暖な地域である。

旧上磯町は近世初期に漁業集落が形成され、幕府領時代には農業開拓が進んだ。寛政11（1799）年に松前藩領から幕府直轄となり、文政4（1821）年松前藩領に復領、嘉永7（1854）年再び幕府直轄となる。明治12（1879）年、有川村・戸切地村が合併して上磯村が成立した。同33（1900）年、上磯村・谷好村・富川村・中野村・清川村が合併して一級町村上磯村が成立。大正7（1918）年1月に上磯村が上磯町と改称した。昭和5（1930）年、上磯町は大字を廃し小字27字となり、同30（1955）年に茂別村を合併し合計33字を編成した。面積は262.41k㎡、人口は3万7,286人である（平成15年3月現在）。平成18年2月、上磯町は北東側に隣接する大野町と町村合併し「北斗市」が成立した。合併後の面積は397.29k㎡、人口は約49,430人（平成18年3月末現在の住民基本台帳による）である。

遺跡名の「矢不來」という地名は、少し前までは「やぎない」と呼んでいたようで「ヤギナイ遺跡」（表Ⅱ-1）という名称で残っている。現在、矢不來の集落の北側に矢不來川が流れている。元禄郷帳（1700年成立）や天明光記（1807年成立）に「やげ内村」と書かれていることから、古くから部落があった場所のようである。永田方正「北海道蝦夷語地名解」によれば「ヤンゲ・ナイ 舟より荷物を揚る処」とある（永田 1984、初版1891）。また、アイヌ語地名研究家の山田秀三によれば「この川口の辺に舟を着けて、漁獲物とか積荷を揚げた処なのでこの名がついたのであろう。」（山田 1984）とある。地名は、やげ内→ヤンゲナイ→ヤギナイ→矢不來（やふらい）と変遷してきたようである。

矢不來8遺跡は茂辺地川河口から約1.2km上流の海岸段丘上に立地する。矢不來8遺跡の南西部では、戦後からごく最近まで畑地として利用されていたため遺物包含層が大きく削平されていた。

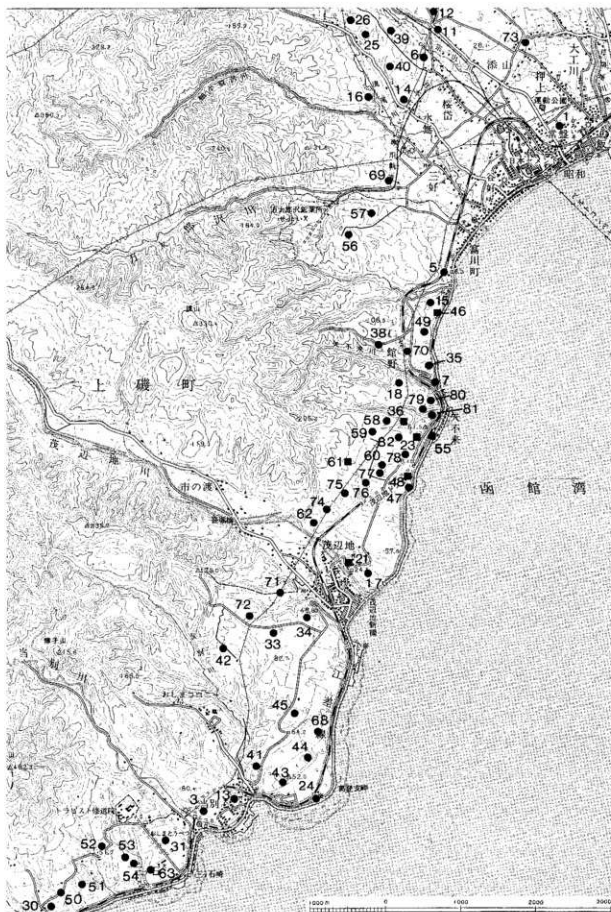
矢不來10遺跡は、矢不來8遺跡の北東約600mに位置し、二つの遺跡の間には茂辺地川に注ぐ沢があり、深い谷地形となっている。矢不來10遺跡は、その沢の左岸に立地し、地形は南に向かう緩斜面となっている。遺跡は矢不來8遺跡と同様に、畑あるいは植林地として利用されてきた。（佐川俊一）

### 2 歴史的環境と周辺の遺跡

現在、旧上磯町内の遺跡は82か所を数える。このうち今回調査を実施した矢不來8遺跡を中心に、JR上磯駅から南西部の三ツ石にかけて64か所の遺跡分布を示した（図Ⅱ-1）。図示したように富川、矢不來、茂辺地、当別、三ツ石にかけての海岸段丘上に遺跡が多く認められる。

矢不來8遺跡周辺でこれまでに発掘調査が行われた遺跡としては、矢不來2遺跡、矢不來3遺跡、矢不來7遺跡、矢不來天満宮跡、矢不來館跡、茂別遺跡などがある。

矢不來2遺跡は昭和61（1986）年に調査が行われた。縄文時代前期には石器製作の場として利用されたようで、同時期の竪穴住居跡が1軒検出されている。遺物は縄文時代後期前葉の涌元式土器が多く、ほかに統縄文時代恵山期のものが少量出土している（北理調査報37）。



図Ⅱ-1 周辺の遺跡

表II-1 周辺の遺跡

番号	名称	種別	所在地	時期	調査歴等	文献
1	下添山	遺物包含地	常盤町	統縄文(恵山)	1979・80(吉崎昌一)	千代1960、吉崎1982
3	当別	遺物包含地	当別	縄文		
5	寺原敷	遺物包含地	富川	縄文	1983(道教委)	道教委1984
6	桜岱	遺物包含地	桜岱	縄文前～後期		
7	ヤギナイ	遺物包含地	館野	縄文中～晩期	1962(上磯町郷土史研究会)、1966(町教委)	町教委1981
11	添山	遺物包含地	添山	縄文後～晩期	1962(町郷土史研究会、千代史)	千代・菅合1963、町教委1983
12	添山2	遺物包含地	添山	縄文		
13	丸山神社	遺物包含地	当別	縄文中期		
14	水無	遺物包含地	桜岱	縄文後期		
15	館野	遺物包含地	館野	縄文早・中・後・晩期	2003・04(道理文)	町教委1981、北理調報237
17	茂別	集落跡	矢不來	縄文早～晩期、統縄文(恵山)	1991～97(道理文)	北理調報121
18	矢不來	遺物包含地	館野	縄文中期(内筒上層)		
21	茂別館跡	館跡	矢不來	中世		河野1924、永田1966、藤本編1980
23	矢不來台場跡	台場跡	矢不來	近世	1999(町教委)	河野1924、森2002、町教委2001
24	葛登志	遺物包含地	茂辺地	統縄文(恵山)		
25	桜岱2	遺物包含地	桜岱	縄文早～後期		
26	桜岱3	遺物包含地	桜岱	縄文後～晩期		
30	フコマ野	遺物包含地	三ツ石	縄文中・後期	1992、1997(町教委)	町教委1993・98
31	三ツ石	遺物包含地	三ツ石	縄文前・中期	1989(町教委)	町教委1990a
33	茂辺地1	遺物包含地	茂辺地	縄文中・後期		
34	茂辺地2	遺物包含地	茂辺地	縄文中期		
35	館野2	遺物包含地	館野	縄文中・後期	1980(道教委)	町教委1981
36	矢不來館跡	館跡	矢不來	中世	2000(町教委)	上磯町史編纂委員会1917、河野1924、藤本編1980、森2002、町教委2001
38	館野3	遺物包含地	館野	縄文中期	1983(道教委)	町教委1981
39	桜岱7	遺物包含地	桜岱	縄文中～後期		
40	桜岱8	遺物包含地	桜岱	縄文後期		
41	当別川	遺物包含地	当別	縄文早・前・晩期		
42	当別川左岸	遺物包含地	当別	縄文後期		
43	当別3	遺物包含地	当別	縄文前～後期、樺文		大沼1984
44	当別4	遺物包含地	当別	縄文早期		
45	茂辺地3	遺物包含地	茂辺地	縄文		
46	富川土塁跡	土塁跡	館野	近代	1987(町教委)	河野1924、町教委1981・88、知内町教委1986
47	矢不來2	遺物包含地	矢不來	縄文前～後期、統縄文?	1986(道理文)	北理調報37
48	矢不來天満宮跡	神社跡	矢不來	中・近世、近代	1987(道理文)	北理調報47
49	館野4	遺物包含地	館野	縄文中・後期	2005(道理文)	北理調報235
50	フコマ野2	遺物包含地	三ツ石	縄文前期	1992(町教委)	町教委1993
51	フコマ野3	遺物包含地	三ツ石	縄文晩期		
52	石倉野1	遺物包含地	三ツ石	縄文晩期		
53	石倉野2	遺物包含地	三ツ石	縄文早・後期		
54	石倉野3	遺物包含地	三ツ石	縄文後期	1991(町教委)	町教委1992a
55	矢不來3	集落跡	矢不來	樺文	1989(町教委)	町教委1990b
56	柳沢1	遺物包含地	柳沢	縄文早～中期		
57	柳沢2	遺物包含地	柳沢	縄文後～晩期		
58	矢不來4	遺物包含地	矢不來	縄文中・後期		
59	矢不來5	遺物包含地	矢不來	縄文中期		
60	矢不來6	集落跡	矢不來	縄文前・後期	2005(道理文)	北理調報235
61	矢不來台場跡2	台場跡	矢不來	近世		武内1968
62	矢不來7	集落跡	矢不來	縄文早～後期	2004・05(道理文)	北理調報232
63	三ツ石2	遺物包含地	三ツ石	縄文中～統縄文	1990(町教委)	町教委1992b
68	当別5	遺物包含地	当別	縄文		
69	柳沢3	遺物包含地	柳沢	縄文中・後期		
70	館野5	遺物包含地	館野	縄文後期		
71	トドメキ川左岸	遺物包含地	茂辺地	縄文後期		
72	茂辺地4	遺物包含地	茂辺地	縄文後期		
73	押上1	遺物包含地	押上	縄文前～後期	2002～05(町教委)	町教委2003～05、市教委2006
74	矢不來8	遺物包含地	矢不來	縄文中～晩期、統縄文	2005・06(道理文)	北理調報232、本書
75	矢不來9	遺物包含地	矢不來	縄文中・後期		
76	矢不來10	遺物包含地	矢不來	縄文早・後期	2006(道理文)	本書
77	矢不來11	遺物包含地	矢不來	縄文後期	2005(道理文)	北理調報235
78	矢不來12	遺物包含地	矢不來	縄文後期		
79	館野6	集落跡	館野	縄文		
80	館野7	遺物包含地	館野	縄文前期		
81	矢不來13	遺物包含地	矢不來	縄文後期		
82	矢不來14	遺物包含地	矢不來	縄文中・後期		

矢不來 3 遺跡では縄文時代の竪穴住居跡が 2 軒検出された。住居跡から出土した土師器の年代により西暦 7 世紀後半と考えられている（上磯町教委 1990 b）。

矢不來 7 遺跡は縄文時代後期後葉の集落跡である。茂辺地川に面した標高約 30m のところに立地し、竪穴住居跡 13 軒等と同時期の遺物約 48,000 点が出土した（北理調報 232）。

矢不來天満宮跡は 18 世紀後半から大正期にかけての神社跡の調査である。拝殿、本殿の建物跡とそれに伴う陶磁器、金属製品など約 10,300 点が出土した（北理調報 47）。

茂別遺跡は茂辺地川左岸の河口付近に位置する。当センターが平成 3 年から同 9 年まで調査をおこなった。遺跡は海岸の段丘崖から内陸へ向かって幅 400m、奥行き 800m の規模で広がっている。ここは昭和 11（1936）年、旧上磯町在住の落合策氏により縄文時代後期末葉の「人面裝飾付異形注口土器」が発掘されたことで考古学史にあって著名である（設楽編 2001）。この土器は昭和 48（1973）年、国の重要文化財に指定された。当センターが行った茂別遺跡の調査は、一般国道 228 号線の法面傾斜の緩和、茂辺地トンネルのオープンカット、拡幅化工事によるものである。調査の結果、縄文時代・続縄文時代の遺構・遺物が大量に検出された。縄文時代のものには、大規模な壕の一部、竪穴住居跡、土壇墓、土壇等と早期から晩期にかけての遺物、続縄文時代のものには、集落跡、土壇墓群とこれらに伴う多量の遺物がある（北理調報 121）。

一方、茂辺地川より南側の標高 70～80m の段丘上には、茂辺地 1 遺跡、茂辺地 2 遺跡、茂辺地 3 遺跡、茂辺地 4 遺跡、トドメキ川左岸遺跡、当別川左岸遺跡など縄文中期、後期の遺跡が知られている。

中世の遺跡には茂別館跡、矢不來館跡がある。茂別館跡は茂辺地川の河口から約 600m 上流の左岸段丘上に位置する。館跡は嘉吉 3（1443）年、津軽の管領安東太郎盛季が南部氏に敗れ、蝦夷地に渡ったとき造ったことにはじまる。その後、長祿元（1457）年 5 月コシャマインの戦いのとき、道南の十館は相次いで攻め落とされたが、当館と上ノ国の花沢館の二館だけが辛うじて残った。

茂別館跡の北北東約 2 km には、中世の矢不來館跡と近世の台場跡が位置する。平成 11・12 年に上磯町教育委員会により調査が実施され、館跡および台場跡に伴う遺構・遺物が検出された（上磯町教委 2001）。調査の結果、館跡は出土した陶磁器類により 15 世紀中葉から 16 世紀初頭に和人によって造営された中世館跡と推測された。また、台場跡では二つの砲台部が確認され、その造営年代が次のように推測された。一つは前幕府時代以前に造営され、文政 4（1821）年復讐後に松前藩が守備した。もう一つの砲台部は、明治 2（1869）年に旧幕府軍が造営したものと推測された（森 2002）。

また、茂辺地、矢不來、富川では明治 2（1869）年 4 月下旬、箱館戦争の新政府軍と旧幕府軍の激戦地となった場所である。とりわけ 4 月 28 日から翌 29 日にかけて、新政府軍は海上と陸上から茂辺地、矢不來へ攻撃をして茂辺地を制圧し、矢不來村、有川村と一挙に進軍した。この時の様子について「矢不來落去、依テ富川へ進入…続テ有川へ進撃ス」（『太政官日誌』）と書かれ、またこの戦闘による上磯周辺の状況に関しては「当別村より茂辺地村、八木内村、富川村、三ツ谷村、戸切地村、有川村迄賣破り在村之百姓周章して蜘蛛の子を散らしが如く右往左往に迷廻り候」（『渡島國戦争日誌』）と記されている。そして 5 月上旬、新政府軍は箱館へ総攻撃を開始し、5 月 18 日には旧幕府軍が五稜郭を明け渡して戊辰戦争が終結した（『上磯町史 上巻』602 頁）。

なお表Ⅱ-1 の番号は、図Ⅱ-1 および旧上磯町の遺跡登録番号と同じである。また、調査歴等、文献欄の「町教委」は上磯町教育委員会、「市教委」は北斗市教育委員会のことである。（佐川俊一）

## Ⅲ 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

#### (1) グリッドの設定

矢不來8遺跡、矢不來10遺跡のグリッド設定にあたっては、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が作成した「函館江差自動車道上磯町館野矢不來間用地測量用地平面図」を基本図として使用した。グリッドの設定は、発掘区を覆う縦横4m間隔のラインにより区画し、横軸のラインにアルファベットの大文字を縦軸のラインにアラビア数字を与えた。なお、測量成果は平面直角座標系第ⅩⅠ系の値(世界測地系)である。

矢不來8遺跡は、平成17年度にも発掘調査を実施しており、その際のグリッド設定に同じである。すなわち、測点SP16300とSP16400を結んでMラインとし、北西から南東にかけてA～Wラインを設定した。これに直交する数字のラインはSP16300を45ラインとして、これより南西側を8～45ラインとした。各グリッドは北西隅のラインの交点で表示した。例えば、Mラインと20ラインの交点の南東側がM20区となる。また、各グリッドは、必要に応じて2m四方のグリッドに分割した。その場合は、グリッド北西側をaとし、反時計回りにb、c、dと表示した。今回の調査範囲は、アルファベットのQ～Vライン間、数字の14～20ライン間である。なお、SP16300およびSP16400の測量成果および水準測量に使用した基準点は、次のとおりである。

SP16300	X=-246872.281	Y=29240.307	2級基準点	H8-2040 (H=33.70m)
SP16400	X=-246927.671	Y=29157.049	3級基準点	H8-3064 (H=59.679m)

矢不來10遺跡についても矢不來8遺跡と同様に道路センターの測点を利用してグリッドを設定した。すなわち、測点SP15900とSP15800を結んでMラインとし、北西側はH～Lライン、南東側はN～Sラインとした。これに直交する数字のラインは、SP15900を20ラインとし、北東に向かって65ラインまで設定した。SP15800およびSP15900の測量成果および水準測量に使用した基準点は、次のとおりである。

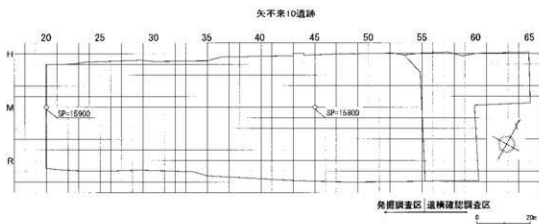
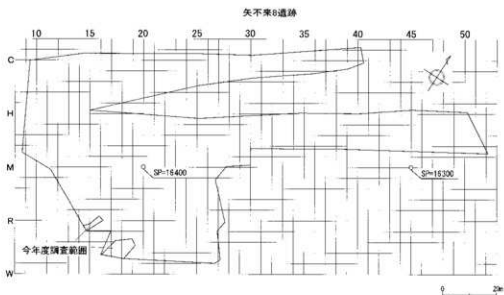
SP15800	X=-246605.800	Y=29721.148	2級基準点	H8-2037 (H=61.80m)
SP15900	X=-246653.759	Y=29633.400	2級基準点	505 (H=67.90m)

(佐川俊一)

#### (2) 基本層序

矢不來10遺跡では、調査範囲において連続する自然層の堆積について、上位のものから順にローマ数字を付して基本層序とした。矢不來8遺跡も同様の層序であるが、前回の調査において現地表土と耕作土をI層として扱っているため、今回の調査でもそれに倣っている。したがって矢不來10遺跡のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は、それぞれ矢不來8遺跡のⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層に対応する。以下では矢不來8遺跡の層位名を( )で括って示してある。

基本層序等の記載にあたっては、『新版 標準土色帖』2004年版(小山・竹原 1967)の「土色」、『土壌調査ハンドブック改訂版』(日本ペドロジー学会 1997)の「野外土性」、「粘着性」、「堅密度」、「層界の明瞭度」、「石礫の形状・大きさ」を用いて表している。



グリッドの表示方法  
 △の人数の範囲内が 100%となる。  
 小グリッドで表わす場合、●の位置は  
 10%となる。

図Ⅲ-1 グリッド設定図

I (II) 層：黒色 (10YR2/1) の埴土。粘着性は中、堅密度は軟、層厚は約10cmで、II層との層界は明瞭～判然である。風倒木痕等のくぼみでは、本層の中間に駒ヶ岳dテフラ、下位に砂質テフラの認められることがある。

\*駒ヶ岳dテフラ (K o - d) : にぶい黄橙色 (10YR7/3) の細粒火山灰。寛永17 (1640) 年降下。

\*砂質テフラ : K o - d より数cm下位に堆積する粗粒火山灰。給源は渡島大島の可能性がある。

II (III) 層：暗褐色 (7.5YR3/3) の埴土。粘着性は中～強、堅密度は軟、径5mm前後の炭化木片が微量に混じる。層厚は約15cmで、III層との層界は明瞭である。本層中には、白頭山苫小牧テフラとみられる明度の高い部分が所々で認められる。

\*白頭山苫小牧テフラ (B - T m) : 黄褐色 (10YR5/6) の細粒火山灰。10世紀中葉降下。

III (IV) 層：黒褐色 (10YR3/1) の埴土。粘着性は中、堅密度は軟、層厚は約20cmである。

IV (V) 層：漸移層。埴土。粘着性は中、堅密度は軟～堅、層厚は約10cmである。

V (VI) 層：褐色 (10YR4/4～4/6) の重埴土。粘着性は中～強、堅密度は堅、矢不來10遺跡のS-43区では層厚約1.8mを測り、下位に堆積する礫層との層界は明瞭である。矢不來8遺跡では、U-17区で層厚約50cmを測り、下位に堆積する(VII)層との層界は画然である。

(VII) 層：浅黄色 (2.5Y7/4) の重埴土。矢不來8遺跡U-17区付近の(VI)層よりも下位で観察された。粘着性は中～強、堅密度はすこぶる堅、垂角～垂円の礫が少量混じる。本層は、矢不來7遺跡(北埋測報232)の堅穴住居跡H3とH6の一部の柱穴で認められた、黄色みのある粘質土に類似する(H3のHP4・9、H6のHP2)。

\*礫層：矢不來10遺跡において、側溝掘削のため深掘りした部分で見られた(S-43区等)。地表から2m程度の深さに堆積する。近付いての観察はできなかったが、拳大以下の垂円礫が主体のようで、V層との層界の形状は平坦である。海岸段丘の堆積物と考えられる。

なお、矢不來8遺跡の道路工手法面部分(Q-17区にあたる)において、V(VI)層と下位の層との層界が波打つようにみられた。凍上現象によって層界が乱されたものであろう。(山中文雄)

### (3) 発掘調査の方法

矢不來10遺跡発掘部分の現況は、荒地(もと畑地)と山林である。調査範囲は幅48m、長さ140mと広いために全体を3地区に分け、西側から、西・中央・東地区と仮称した。

中央地区は30～40ライン間で、西地区にかけて旧上磯町の道路敷地(幅10m)が斜めに位置する。この道路敷地はしばらく放置されていたために敷地の両側に側溝らしいものは認められるが、その部分に立木があり、現状では車が通行できるような状況ではない。道路敷地の東側は荒地だが、ごく最近まで畑として利用されていた。道路敷地の西側から西地区(20～30ライン間)にかけては、立ち木の高さ約10mの植林された山林である。東地区は40～55ライン間である。こちらも西地区と同じように植林された山林だが、立木の高さは約3mと西地区に比べ低い。

7月上旬、人力による調査を開始する前、山林部分では立木の伐採・抜根、表土除去を実施した。また荒地部分は、もと耕作地であることから重機を使用して表土・耕作土を除去した。

調査は中央地区の荒地部分から開始、その後、同地区の山林部分、西地区、東地区へと展開した。

9月下旬、発掘部分の東側に隣接する遺構確認部分の調査が決定した。このため、10月は発掘部分東地区の調査と並行してこの部分の調査を実施した。遺構確認部分の調査は、東側の畑地と西側の山林部分に分けられる。最初に山林部分の立木の伐採・抜根、表土除去を実施し、その後畑地の調査を実施した。

発掘部分における調査方法は次のとおりである。まず、重機を使用して耕作土・表土を除去、その





後人力による表土除去面の精査、25%調査、包含層調査、遺構調査、調査終了面精査という工程で実施した。遺構確認部分では、重機を使用して表土から遺構確認面であるV層上面まで除去し、人力による遺構確認作業を実施した。なお、調査範囲の中で最も標高の高い遺構確認部分の畑地と山林の境界付近において旧石器確認のためのトレンチ調査を実施したが、遺物は出土しなかった。

矢不來8遺跡の調査範囲は、市道の両側にある高圧線の電柱とその支線部分である。9月25日、北海道電力株式会社による調査範囲内の電柱および支線撤去が予定されたので、北海道教育委員会の指示により当センターがその撤去工事に立ち会った。その後、重機を使用して調査範囲の表土除去を実施、10月3日から人力による調査を開始した。調査範囲が狭いため、作業員10名程度で実施した。調査は包含層調査、遺構調査、調査終了面精査の工程で進め、10月25日に終了した。(佐川俊一)

## 2 遺物整理の方法

### (1) 遺物整理の方法

調査で取り上げられた土器・石器等の人工遺物は、現地ですぐに水洗いした。乾燥後、両者を後述する基準で分類し、それぞれ遺物カードを作成して遺物収集帳に登録・集計した。矢不來10遺跡については、上記の作業後、出土土器への注記まで行ったが、矢不來8遺跡については、調査開始が10月からであったことに加え、遺物点数も多かったため、遺物分類から注記までの諸作業は11月から江別市内の当センターで行うこととした。

当センターで行われた二次整理作業では、まず上記の矢不來8遺跡の諸作業を終了させた。つづいて土器は接合作業に入り、器形を復原できたものは立面の実測、破片ではあるが特徴的なものは拓影図の作成と断面実測を行った。石器は注記の際に簡単な接合作業を行い、完形品や特徴的なものについて実測図を作成した。報告書掲載遺物の図化後、それらの写真を撮影した。

注記内容は以下のとおりであるが、約2cm以下のものについては行っていない場合がある。なお、矢不來8遺跡のQ-15~17区は、調査が前回と今回の二次にわたっていることから、重複を避けるため、ヤフ8の前に年度を表す「06」を加えている（06ヤフ8）。

遺構	遺跡名	遺物番号	層位	遺跡名	ゾウフ	遺物番号	層位
遺構	ヤフ8・H2	・1	・F1	包含層	ヤフ8・T17	・23	・IV

### (2) 土器類の分類

土器類は、時期と破片部位の分類を行っている。容器と考え難いものは土製品とし、袖珍土器や焼成粘土塊等が含まれる。

**時期分類：**縄文時代の土器をI~V群に大別し、それぞれの中で二、三の類別を設けている。統縄文時代のものはVI群、濠文時代のものはVII群とし、時期が判断できないものは未分類として扱った。

I群：縄文時代早期に属するもの

- a 類：貝殻文系土器群
- b 類：東銅路式系土器群

II群：縄文時代前期に属するもの

- a 類：縄文尖底土器群
- b 類：円筒土器下層式に相当するもの

III群：縄文時代中期に属するもの

- a 類：円筒土器上層式、サイベ沢Ⅷ式に相当するもの
- b 類：見晴町式、榎林式、大安在B式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群：縄文時代後期に属するもの

a 類：天祐寺式、涌元Ⅰ式、涌元Ⅱ式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

b 類：ウサクマイC式、手稲式、麓澗式、エリモB式に相当するもの

c 類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

Ⅴ群：縄文時代晩期に属するもの

a 類：大洞B式、大洞B<sub>2</sub>式とそれに並行する在地の土器群

b 類：大洞C<sub>1</sub>式、大洞C<sub>2</sub>式とそれに並行する在地の土器群

c 類：大洞A式、大洞A'式とそれに並行する在地の土器群

Ⅵ群：続縄文時代に属するもの

Ⅶ群：擦文時代に属するもの

未分類：時期が判断できないもの

**破片部位分類**：破片の部位を、口縁部、胴部、底部、不明に分類した。

口縁部：口唇部のあるもの（口縁部突起を含む）

胴部：口縁部、底部、不明以外のもの（貼付帯等を含む）

底部：底面のあるもの

不明：上記三者にあてはまらないもの

### （3）石器類の分類

石器類は、素材、製作技術、使用痕等によって、剥片石器群、磨製石器群、礫石器群、礫の四つに分け、それぞれの中で器種分類を行った。礫としたものは、加工痕、使用痕とも認められないものである。ただし、頁岩の礫は剥片石器の原石として扱っている。

剥片石器群：剥片を素材とする石器群である。二次加工による形態差等から、石鏃、石槍、石錐、石匙、石筥、スクレイパー、Rフレイク（二次加工痕のある剥片）、Uフレイク（微細剝離痕のある剥片）、石核、フレイク（チップを含む）、剥片石器原石、剥片石器片に分類される。二次加工（痕）は、石器の整形・調整のための加工痕を、微細剝離痕は長さ2mm以下の剝離痕を指すときに用いている。なお、微細剝離痕には、剥片剝離時に石核と剥片縁辺とが接触して発生する「偶発剝離痕」が含まれている可能性がある。剥片石器片は、本来の器種が判別できない定形的な剥片石器の破片である。

磨製石器群：製作に研磨を用いる石器群で、磨製石斧がある。

礫石器群：自然面を広範にとどめる石器群である。用いられる礫の形態や使用痕によって、たたき石、すり石、砥石、台石、石皿、加工痕のある礫に分類される。すり石には、（半円状）扁平打製石器と称されるものを含めている。

### （4）遺物・記録類の保管

整理終了後の遺物は、報告書掲載のものと、非掲載のものを区分してコンテナ等に収め、「遺物収納台帳」に登録した。遺物は、「遺物収集帳」、「遺物収納台帳」とともに、北斗市教育委員会で保管される予定である。

発掘調査と整理作業で作成された図面や写真等の記録類は、当面、北海道立埋蔵文化財センターで保管される。

（山中文雄）

## Ⅳ 矢不來 8 遺跡

### 1 遺構とその出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡 1 軒 (H 2)、焼土 1 か所 (F 5)、柱穴様の小土坑 3 か所 (SP14~16) が検出されている。

#### (1) 竪穴住居跡

H 2 (図Ⅳ-2・3、表Ⅳ-1・4・5、カラー図版2、図版1~3)

位置 U-17区 規模  $(2.24) \times (0.75) / (2.12) \times (0.64) / 0.65$  (m)

調査 U-17区のⅡ層で、暗褐色土の広がりが認められた。暗褐色土中にはⅡ層の土がやや多量に混じっており、遺構の覆土と推測された。調査区の境界にできた壁面に沿って掘り下げたところ、床面と壁の立ち上がり、柱穴とみられる輪郭も確認されたので、竪穴住居跡と判断して調査した。床面直上では炭化木片のまとまりが検出されている。大部分が調査区外にあり、住居跡北側の一部についての調査である。

覆土 覆土にはⅡ層の土がやや多量に混じる。炭化木片も少量混じる。

形態 大部分が調査区外にあるため、平面形は不明である。北西側は攪乱により失われている。床面は平坦で、Ⅱ層とⅢ層中につくられる。壁の立ち上がりは急である。深さは東側で約70cmを測るが、斜面につくられているため西側にいくほど浅くなる。

付属遺構 柱穴は床面で 1 か所 (HP 1) 検出された。HP 1 は上端が楕円形の輪郭として確認された。途中から垂直きみとなり、深さ59cmを測る。この他、HP 2 は直径が細く先端が尖るため、杭痕かとみられる。

遺物出土状況 床面直上でスクレイパーとRフレイク、床面でフレイク 4 点とたたき石が出土している。覆土からはⅣ群の土器片が少数得られている。

掲載遺物 1 は覆土、2 は床面、3 は床面直上からの出土である。1 はⅣ群土器の胴部破片で、横走きみの縄文が施される。2 はたたき石で、乳棒状の礫を用いている。黒褐色の物質が多量に付着しており(網伏せ部分)、付着のない部分の所々に擦痕が見られる。3 はスクレイパーで、刃部は内湾きみである。石材は2が凝灰岩、3が珪質頁岩である。

時期 時期の推測は困難であるが、他の遺構や周囲の遺物出土状況からすると、縄文時代中期後半から後期前葉の可能性がある。

#### (2) 焼土

F 5 (図Ⅳ-3、表Ⅳ-1、カラー図版2)

位置 T-18区 規模  $0.60 \times 0.36 / 0.08$  (m)

調査 T-18区のⅣ層中位で、赤みを帯びた土の広がりが認められたため、焼土として調査した。炭や骨片は見られない。

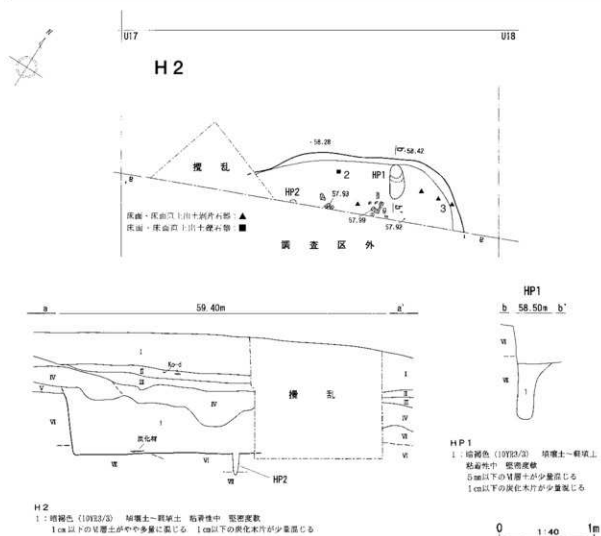
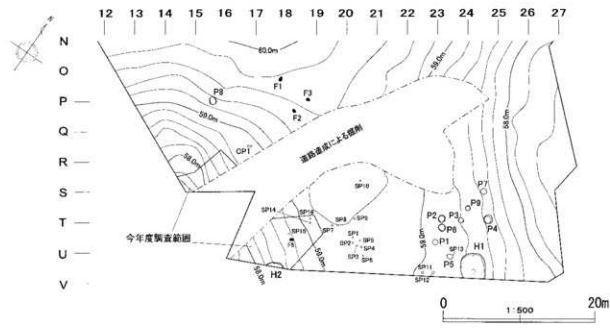
形態 平面は楕円形、断面は皿状である。

焼土 褐色を呈し、堅密度は堅である。

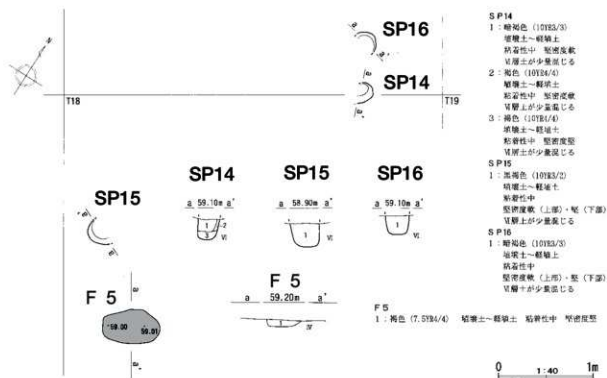
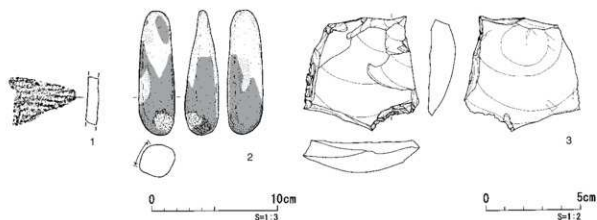
遺物出土状況 周囲からは、Ⅳ群の土器片やフレイク等が多く出土している。

時期 検出された層位と周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と考えられる。





図Ⅳ-2 遺構位置図 (Nライン以南)、H2 (1)



図Ⅳ-3 H2 (2)、F5、SP14~16

### (3) 柱穴様の小土坑

SP14~16 (図Ⅳ-3、表Ⅳ-1、カラー図版2、図版2・3)

位置 SP14 S・T-18区  $0.21 \times (0.18) / 0.12 \times (0.12) / 0.22 (m)$

規模 SP15 T-18区  $0.31 \times (0.14) / 0.23 \times (0.08) / 0.26 (m)$

SP16 S-18区  $0.25 \times (0.12) / 0.18 \times (0.08) / 0.20 (m)$

調査 VI層で暗褐色等の土が小円形に認められた。その半分を掘り下げたところ、柱穴様の断面が観察されたため、規模から柱穴の可能性のある小土坑として調査した。遺物は出土していない。

覆土 SP14は暗褐色と褐色、SP15は黒褐色、SP16は暗褐色を呈し、いずれもVI層が少量混じる。

形態 平面は円形で、底面に向かってややすぼまる。

時期 時期の推測は困難であるが、他の遺構や周囲の遺物出土状況からすると、縄文時代中期後半から後期前葉の可能性はある。  
(山中文雄)

## 2 包含層出土の遺物

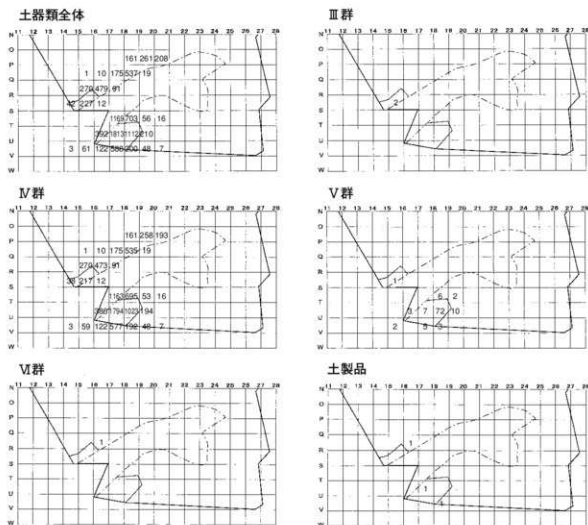
包含層等の遺物は、土器類7,550点、石器類1,001点、合計8,551点を数える。すでに包含層の失われている部分が多いもの、おおよそ1グリッドを掘り下げることのできたT-17・18区では、それぞれ1,000点を上回る遺物が得られている。なお遺物分布図は、平成17年度の調査で取り上げられたものと合わせて作図してある。

### (1) 土器類

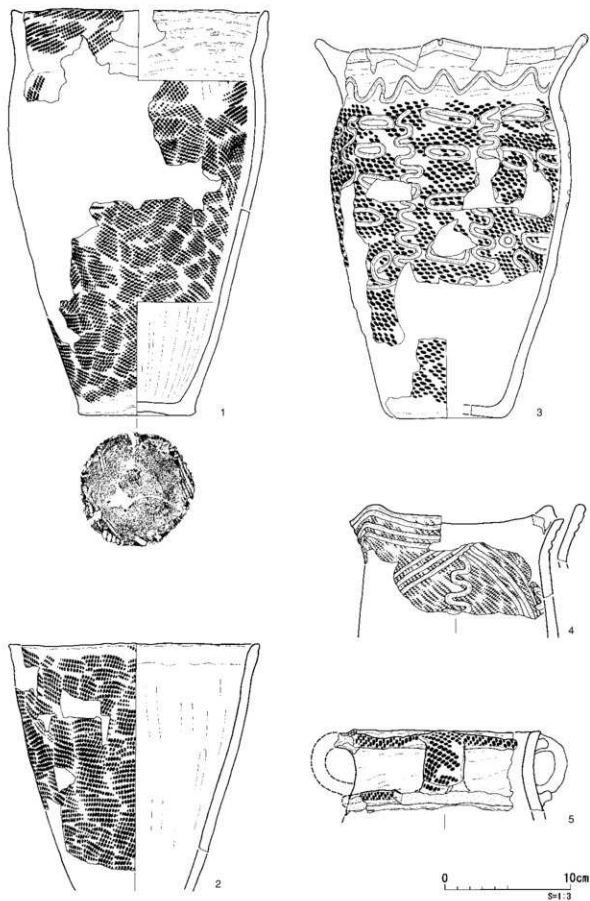
土器類7,550点の内訳は、土器7,547点、土製品3点である。土器はⅣ群（縄文時代後期）が7,347点で土器全体の97.3%を占める。口縁部破片を見ると、縄文が斜行、横走、羽状となるもの他にタガ状の貼付帯、縄線文、沈線文等が施されるものや、折り返し状の口縁もあることから、後期前葉にあたるⅣ群a類が主体とみなされる。この他、Ⅲ群（縄文時代中期）が6点、Ⅴ群（縄文時代晩期）が120点ある。また、時期分類が困難で未分類とした破片が74点ある。Ⅴ群のうち9点には赤の彩色が認められるが、小破片のため掲載していない。土製品は、袖珍土器、焼成粘土塊、赤の彩色が施された把手状の土製品が、それぞれ1点得られている。

### Ⅲ群（図Ⅳ-6、表Ⅳ-4、図版6）

6は口縁部の破片である。縄圧痕のある粘土紐が口唇部から小波状に付される。工具の角による三角形の刺突文も施される。Ⅲ群a類に相当する。



図Ⅳ-4 土器類分布図



図Ⅳ-5 包含層出土の土器(1)



## IV群 (図IV-5~9、表IV-4、図版5~9)

1は口縁部のややくびれる平縁の深鉢である。LR原体を口縁部で横回転、胴部以下では縦回転させている。底面は中央にかけてややくぼむ。口唇部は丸みのある部分と平坦ぎみの部分がある。内面はナデられ、口縁部で横方向、胴部以下では縦方向の調整痕が見られる。外面の胴部下半は赤みを帯びており、使用による被熱の痕跡と考えられる。2は平縁の深鉢で、LR原体による横走縄文が施される。内面はナデられ、口縁部では横方向、胴部以下では縦方向の調整痕が見られる。口唇部は平坦ぎみである。3は頸部のある波状口縁の深鉢である。口縁部は折り返し状で、波頂部に刻みが付けられる。頸部は無文地に横の蛇行沈線文が描かれる。胴部から底部の地文は、LR原体の縦回転によるものである。胴部上半は、縦方向の蛇行沈線文でいくつか区画され、その間に楕円形の沈線文が4段ほど施される。底面の縁より内側はややくぼむ。外面の胴部下半は赤みを帯びており、使用による被熱の痕跡と考えられる。4は口縁部が外傾する。波状口縁で、波頂部は4か所であろう。地文は節の細かなLR原体の縦回転によるものとみられる。口縁に沿って3条の沈線が引かれる。胴部上半は3条1組の沈線で三角形に区画され、その中に縦の蛇行沈線文が描かれる。口唇部は平坦ぎみである。内面はナデられ、口縁部で横方向、胴部では縦方向の調整痕がみられる。5は口唇部直下と頸部下端に貼付帯が付き、その間を把手がつなぐ。貼付帯と把手には縄文が施されるが、口頸部は無文である。内面には丁寧な調整が横方向に見られる。上面観は楕円形を呈する。

7~14・16・17は口縁部にタガ状の貼付帯が付き、口唇部が平坦ぎみである。7~11は、地文と貼付帯上とで原体の回転方向を変え、羽状の構成としている。7・8は貼付帯に挟まれた部分が無文である。7は口唇部にも縄文が施される。8は小突起が付き、上下の貼付帯をつなぐ縦の貼り付けがある。地文はLR原体の縦回転によるもので、結節も見られる。9・10は貼付帯間の幅が広く、9では羽状縄文、10では斜行縄文が施される。11は貼付帯が2条近接して付き、貼付帯が磨耗しているため、拓影図では縄文が判然としていない。12~14は貼付帯上に縄線文を加える。12は貼付帯に挟まれた部分が無文である。地文と貼付帯上とでLR原体の回転方向を変え、貼付帯上にはLR縄線文を施す。13の貼付帯上には、地文と方向の異なる縄文がわずかに認められる。14の地文は複節RLR原体によるもので、回転方向を変えて羽状としている。地文と貼付帯の先後関係は、不明である。12・13・16を除き、7・8・11・14・17が地文が先、9・10が貼付帯が先に施される。

15・18~25は、同一原体の回転方向を変えることで、口縁部の縄文を羽状に施す。15・18のように折り返し状の口縁に施されるものもある。15には穿孔途中の補修孔らしきくぼみがある。21はRL原体によるものである。23は他の破片に比べ、胴部寄りで羽状となる。口唇部にも縄文が施される。24は口縁部側、25は胴部側の縄文が横走りぎみである。どちらもLR原体によるものである。

26~32は口縁部に縄線文が施される。26・27は縄線文が1条、28~30は2条、31は3条のものである。縄線文の原体は、26は判然としなが、27は1段L、28~31はLRである。27には補修孔がある。30の地文はR原体による燃糸文とみられる。32は縄線文間に中空の工具による円形刺突文が加えられる。地文、縄線文とも原体は1段Lである。

32・33・35は口縁部に中空の工具による円形刺突文が施される。33は縄文地に円形刺突文が2段、35は無文地に円形刺突文が3段ほど施される。35は器形のくびれる部分に縄線文が加えられる。

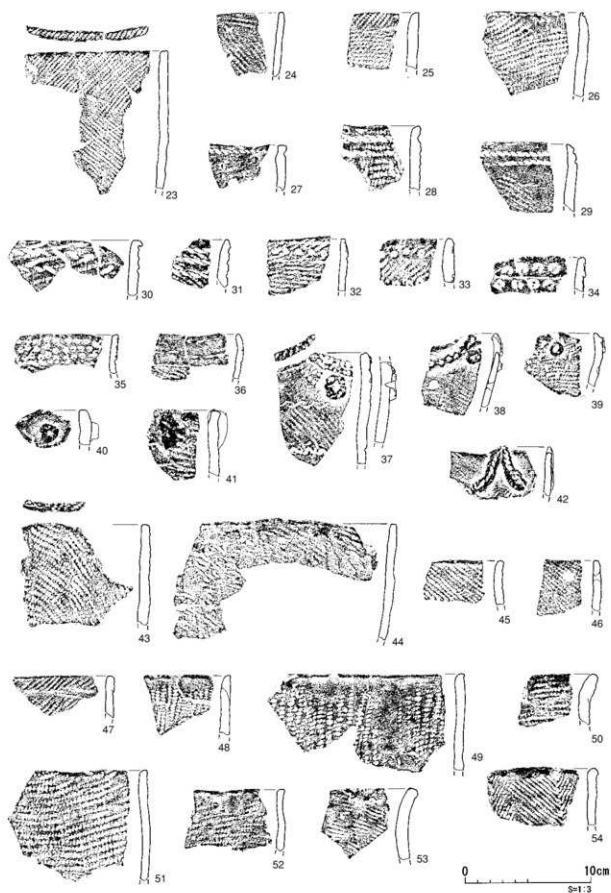
34は折り返し状の口縁部に、縄を馬蹄形に丸めて押圧したものであろう。

36は、沈線で区切られた無文地の口縁部に、横方向の刻みが連続して加えられる。

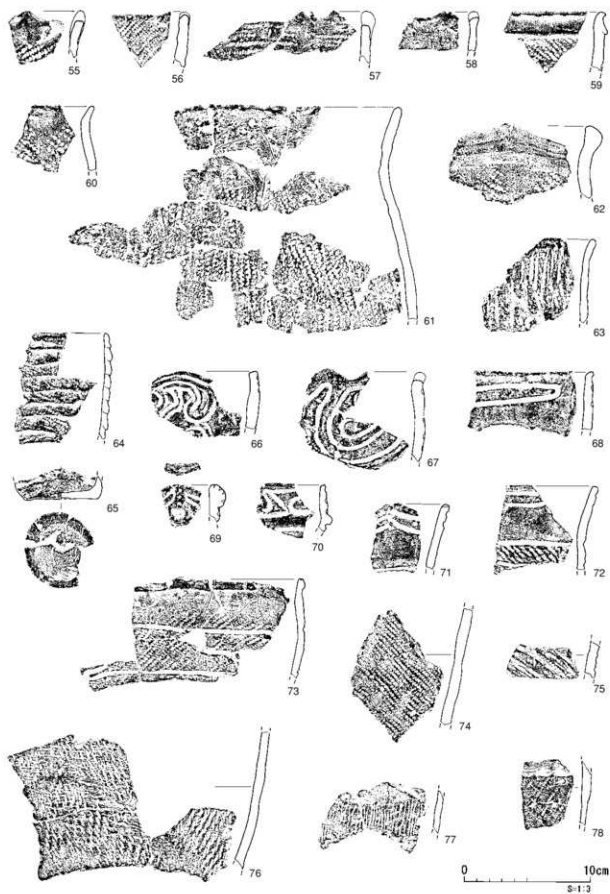
37~42は口縁部に貼付がある。37~39はボタン状貼付文がある。37・38には刺突のある貼付文も付される。37は結節が見られ、口唇部に縄の圧痕がある。38・39は口縁部が内湾する。38には補修孔が



図Ⅳ-6 包含層出土の土器(2)



図IV-7 包含層出土の土器(3)



図Ⅳ-8 包含層出土の土器(4)

ある。39は貼付文の周りを刺突で囲む。40は無文地に円形の貼付が付される。41は輪積み痕の目立つ器面に縦長の貼付が付される。42は縄線文の施された「へ」字状の貼付が付される。

43～54は口縁部に縄文が見られる。43～46はL R 原体の縦回転による斜行縄文が施される。43は口唇部にも縄文が施される。46には補修孔がある。47はL R 原体の横回転による斜行縄文が施される。折り返し状の口縁である。48はR L 原体による縦走縄文で、折り返し状の口縁である。49の文様は1段Rを巻きつけた絡糸体によるものかもしれない。50～52はL R 原体による横走ぎみの縄文が施される。50は折り返し状の口縁である。53は1段L 原体の回転による無節の縄文である。54はL R とR 原体による結束第1種羽状縄文が縦方向に施される。55～58は口唇部に小突起が付される。地文と小突起の先後関係は、不明である57を除き、55が地文が先、56が小突起が先である。57の小突起は2個1組である。55～57の原体はL R、58は無文である。

59～62は口唇部直下が無文である。59は折り返し状の部分が無文で、地文の縄文が先に施される。60・61は口縁部が外傾する。61の胴部は縄文が縦走する。62は口唇部直下が外側に肥厚する。

63は工具を縦に引いたあとがいくつもある。64は輪積み痕を明瞭に残す。65は64と同一個体の底部で、縁より内側がわずかにくぼむ。

66～72は無文地の口縁部に沈線文が施される。口縁の形状は66が波状、67が小波状、68が平縁である。67の沈線文は渦巻き状である。69は波頂部の破片とみられる。肥厚部分には、串状の工具による刺突が正面に3か所、上面に1か所加えられる。70は口縁部より下で器形が屈曲する。71・72は同一個体で、口縁に沿って2条の沈線が引かれ、無文帯を挟んで、胴部には磨消縄文が施される。71は波頂部に刻みが付けられる。

73は折り返し状の口縁で、口縁部のわずかにくびれる部分は無文である。胴部にはR L 原体の縦回転による縄文地に、2条の横走沈線が引かれ、その間をつなぐ沈線文が描かれる。

74～80は胴部の破片である。74は複節斜行縄文が施される。75には無節斜行縄文も見られる。76～77は捩糸文が施される。76・77は1段R 原体によるものである。78は網目状の文様が認められるが、炭化物の付着のため、捩糸文かどうか判然としない。79は沈線文、80は磨消縄文が施される。

81～93は底部の破片である。81はタガ状の貼付帯が付される。82は底面の縁より内側がくぼむ。83～85は底面が平らである。83は無文、84・85はL R 原体の縦回転による縄文が施される。83は底部端の張り出しがやや顕著である。84の底面には擦痕が認められる。85は内面全体に炭化物が付着する。86～90は底面がくぼむ。87はL R 原体の縦回転による縄文が施され、86・88～90は無文である。91・92は底面に木葉痕が認められる。92はL R 原体による横走縄文が施される。93は底面にL R 原体による縄文が施される。

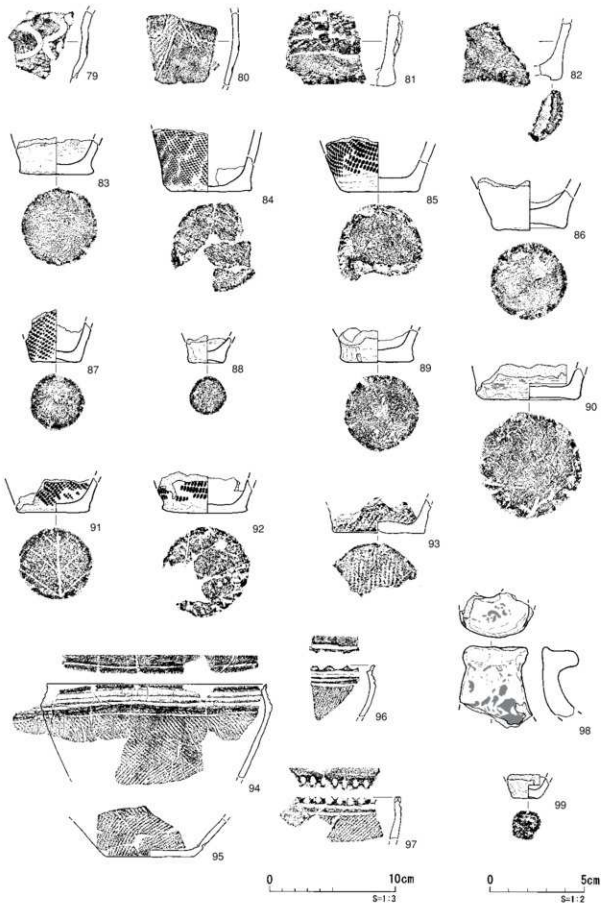
上記の資料はいずれもIV群a類に相当する。

#### V群 (図IV-9、表IV-4、図版9・10)

94・95は同一個体の鉢で、口縁部と胴部の境が張り出す。口縁部には3条の横走沈線が引かれ、口唇部には細い刻みが連続する。胴部にはR L とL R 原体による羽状縄文が施される。器形の張り出す部分には、1条の横走沈線と突起の剥落痕が見られる。横走沈線は、突起を貼り付けた後に引かれる。口唇部内面を1条の沈線がめぐる。96・97は口縁部に数条の横走沈線が引かれる。96は口唇部に小突起が連続する。器形は内湾し、口唇部内面には沈線が引かれる。97は口唇部直下の内外面に刻みが交互に付けられている。

#### 土製品 (図IV-9、表IV-4、カラー図版3、図版10)

98は赤の彩色(網伏せ部分)が施された把手状の土製品である。上面から見ると、端が二手に分かれている。99は袖珍土器で、口縁部を欠損する。



図Ⅳ-9 包含層出土の土器(5)・土製品

**(3) 石器類**

石器類1,001点の内訳は、剥片石器群718点、磨製石器群8点、礫石器群37点、礫247点である。

剥片石器群は、石鏃7点、石槍1点、石錐3点、スクレイパー88点、Rフレイク48点、Uフレイク66点、石核17点、フレイク473点、剥片石器原石3点、剥片石器片4点に分類される。石鏃は無茎鏃(三角形凹基)1点、有茎鏃5点、未成品1点で、有茎鏃にはアスファルトの付着するものがある。スクレイパーは、刃部と反対側に幅広く自然面を残し、横断面が三角形状になるものが多い。数点の刃部に光沢が認められる。剥片石器群に用いられる石材は、珪質のものも含め頁岩が大半で、黒曜石は石槍の1点のみである。

磨製石器群は、磨製石斧8点がある。完成品はなく、刃部のある破片2点、基端部のある破片3点、未成品1点がある。石材は泥岩や片岩等がある。

礫石器群は、たたき石19点、すり石4点、台石1点、加工痕のある礫12点に分類される。たたき石は、扁平礫の側縁に使用痕のあるものが多い。赤色顔料の付着するものがある。すり石は、(半円状)扁平打製石器と称されるものが3点ある。礫石器群に用いられる石材は、砂岩、泥岩等がある。

三つの石器群から、定形的とされる石器について点数が多い順に挙げると、スクレイパー88点、たたき石19点、磨製石斧8点、石鏃7点、すり石4点、石錐3点、石槍、台石各1点となる。最も多いスクレイパーは、これらのうちの67.2%を占める。

**剥片石器群** (図IV-12・13、表IV-5、図版10・11)

**石鏃** 1は三角形凹基で、無茎鏃はこの1点のみである。2～6は有茎鏃である。2～4は平基であるが、2はやや凹基ぎみである。5・6は凸基である。4～6の茎部にはアスファルトが付着している(網伏せ部分)。石材は1が珪質頁岩、2～6が頁岩である。

**石槍** 7は欠損しているものの、基部と茎部の境が明瞭である。石材は黒曜石で、流理の縞模様が目著しに認められる。

**石錐** 8・9はいずれも素材の一端に錐部を作り出している。8は錐部付近に微細刻離痕が連続する。9は自然面のある横長剥片を素材としている。石材はどちらも頁岩である。

**スクレイパー** 10～14は1縁辺に刃部がある。10～13はいずれも刃部と反対側が自然面で、横断面が三角形状である。スクレイパーではこの形態が最も多い。10・13は刃部が弧状で、13の刃部両面には光沢が認められる(網伏せ部分)。12は刃部がわずかに内湾する。14の刃部は急角度である。15～20は2縁辺に刃部がある。16の表面下端側の刃部は急角度である。17は一方の刃部が内湾する。18・19は横長の剥片を素材とする。19は二次加工がほぼ全周に施される。20は両縁辺が収束して尖端となる。21は表面右側の縁辺に抉りがある。石材は15が珪質頁岩で、他は頁岩である。

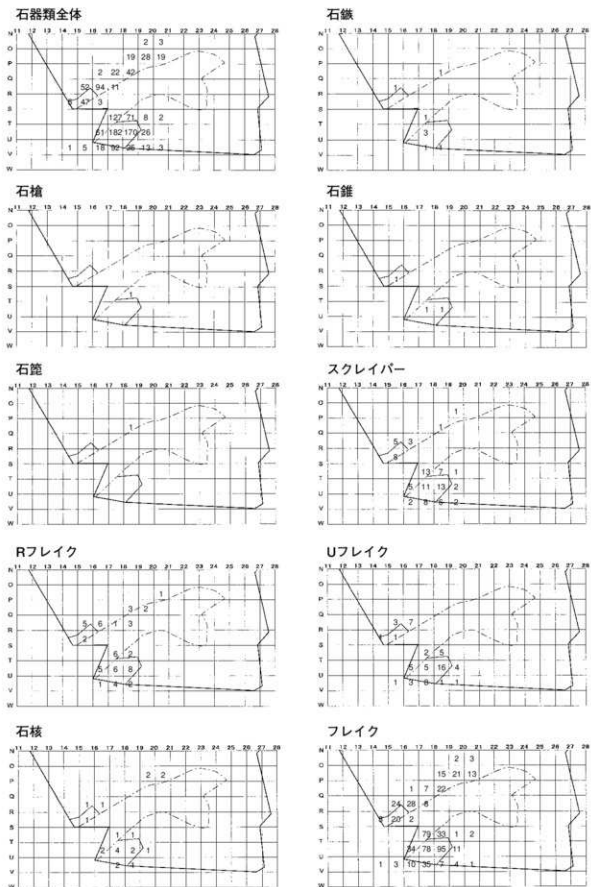
**石核** 22は石核で、多方向からの刻離痕が見られる。石材は頁岩である。

**磨製石器群** (図IV-14、表IV-5、図版11)

**磨製石斧** 23は裏面の右側面付近に敲打痕がわずかに見られ、ほぼ全面が研磨される。両刃で、刃縁は円刃である。24はほぼ全面が研磨される。両刃で、刃縁は直刃ぎみである。25は基端部の破片で、一方の側縁には稜が認められる。石材は23が片岩である。24は変成岩の一種、25は火成岩の一種とみられる。

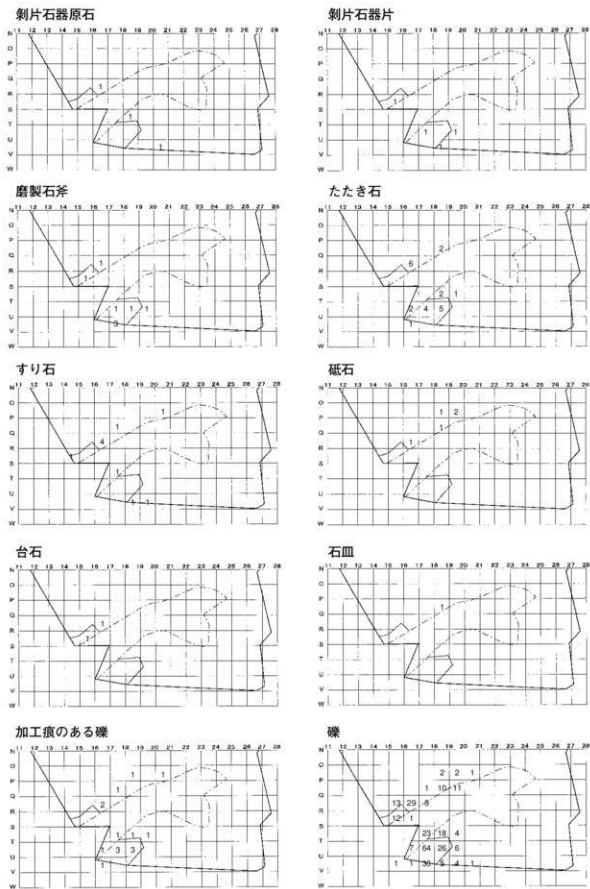
**礫石器群** (図IV-14・15、表IV-5、カラー図版3、図版11)

**たたき石** 26は礫の端部に敲打痕が見られる。赤色顔料が広範に付着する(網伏せ部分)。27は楕円礫の両面と両側縁に敲打痕が見られる。28は棒状礫の両面、両側縁に敲打痕が見られる。29は扁平礫の長軸両端付近に敲打痕が見られる。30は礫の側縁と平坦面に敲打痕が見られる。石材は26・28が泥岩、27・29・30が砂岩である。

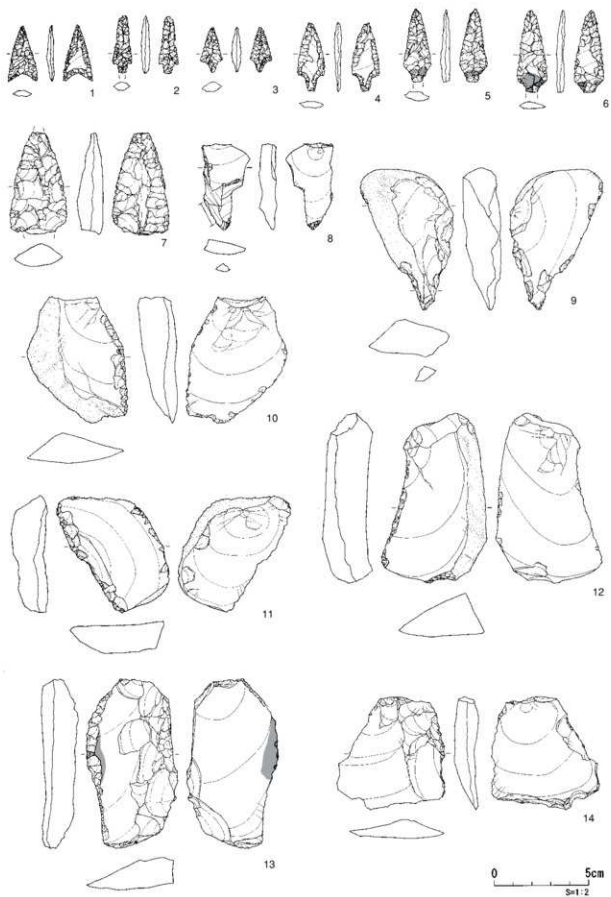


図IV-10 石器類分布図(1)

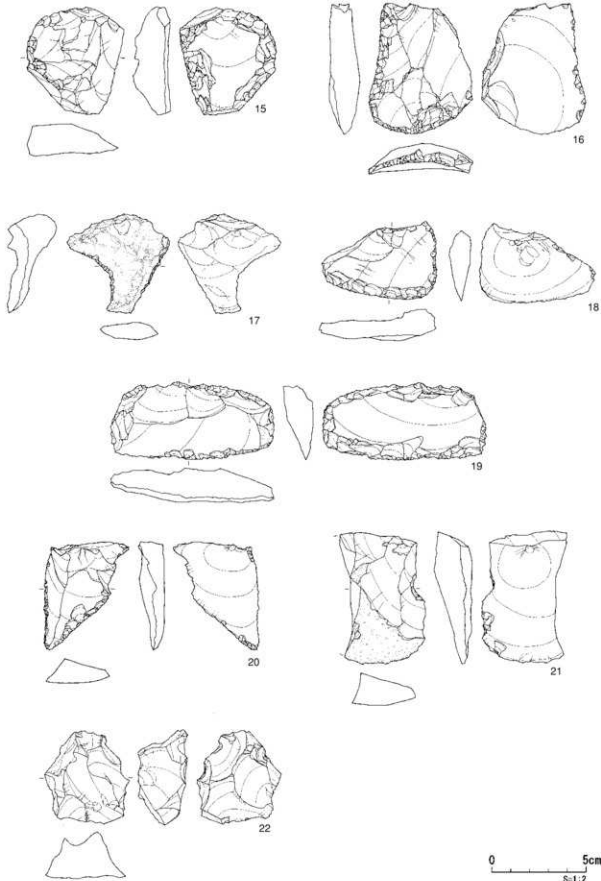




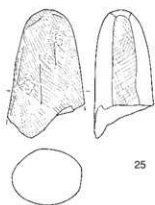
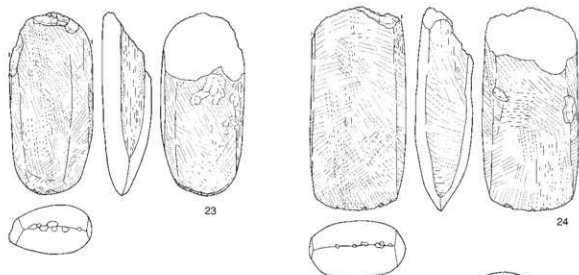
図IV-11 石器類分布図(2)



図Ⅳ-12 包含層出土の石器（1）



図IV-13 包含層出土の石器(2)



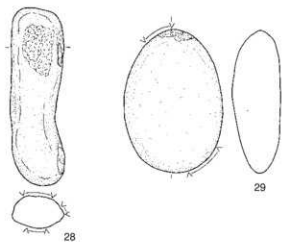
0 5cm  
S=1:2



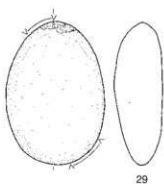
26



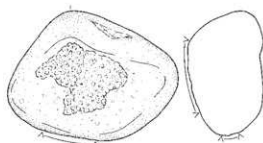
27



28



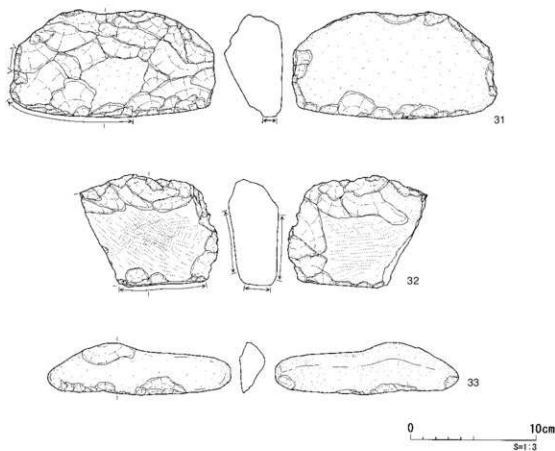
29



30

0 10cm  
S=1:3

図Ⅳ-14 包含層出土の石器(3)



図IV-15 包含層出土の石器(4)

すり石 31・32とも半円状扁平打製石器と称されるものである。31は表面の全周と裏面の一部を打ち欠いている。長軸側的一端には敲打痕が見られる。すり面の幅は1.5cmを測る。32は両面の周縁を打ち欠いている。加工の施されない部分は平滑で、表面はややくぼんでいることから、石皿を転用したものかもしれない。すり面の幅は2.4cmを測る。石材は31が砂岩、32が凝灰岩である。

加工痕のある礫 33は棒状礫の稜を打ち欠いている。石材は凝灰岩である。

(山中文雄)

表IV-1 遺構一覧

遺構名	遺構種類	位置	規模・範囲 (m)				深さ・厚さ	備考
			確認面		床面・底面			
			長径	短径	長径	短径		
H 2	竪穴住居跡	U - 17区	(2.24)	(0.75)	(2.12)	(0.64)	0.65	北側の一部
H 2 HP 1	H 2 柱穴		0.36	0.15	0.14	0.12	0.59	
H 2 HP 2	H 2 杭穴		0.06	(0.03)	-	-	0.23	
F 5	焼土	T - 18区	0.60	0.36	-	-	0.08	
S P 14	柱穴様小土坑	S・T - 18区	0.21	(0.18)	0.12	(0.12)	0.22	
S P 15	#	T - 18区	0.31	(0.14)	0.23	(0.08)	0.26	
S P 16	#	S - 18区	0.25	(0.12)	0.18	(0.08)	0.20	

表Ⅳ-2 土器類集計

分類\出土地点		遺構	包含層等									合計
時期	破片部位	H2 覆土	I層	II層	III層	IV層	V層	風倒木痕	攪乱	表面採集	小計	
III群	口縁部									1	1	1
	胴部			2						3	5	5
小計				2						4	6	6
IV群	口縁部		27	28	230	292		46	42	4	669	669
	胴部	6	267	409	2,243	2,686	1	310	331	104	6,351	6,357
	底部		19	15	125	123		16	21		319	319
	不明		1	2	2	2			1		8	8
小計		6	314	454	2,600	3,103	1	372	395	108	7,347	7,353
V群	口縁部		2	3	6	3		1	2		17	17
	胴部		6	8	41	13		4	15	8	95	95
	底部				7						7	7
	不明		1								1	1
小計			9	11	54	16		5	17	8	120	120
未分類	口縁部		1	4	1			1	1		8	8
	胴部		7	3	19	9			11	4	53	53
	底部			3	1	3			1		8	8
	不明			1	1	3					5	5
小計			8	11	22	15		1	13	4	74	74
土製品	袖珍土器				1						1	1
	焼成粘土塊				1						1	1
	土製品			1							1	1
小計				1	2						3	3
合計		6	331	479	2,678	3,134	1	378	425	124	7,550	7,556

表Ⅳ-3 石器類集計

分類\出土地点		遺構			包含層等								合計
石器群	器種	H2		I層	II層	III層	IV層	風倒木痕	攪乱	表面採集	小計		
		床面直上	床面									小計	
剥片	石鏃					1	5		1		7	7	
	石槍								1		1	1	
	石錐					3					3	3	
	スクレイパー	1		1	5	5	28	36	2	11	1	88	89
	Rフレイク	1		1	8	1	9	22	2	5	1	48	49
	Uフレイク				2	5	20	22	3	12	2	66	66
	石核				3		5	7		2		17	17
	フレイク		6	6	28	29	189	157	24	40	6	473	479
	剥片石器原石						1		1	1		3	3
	剥片石器片						3	1				4	4
小計		2	6	8	47	40	258	251	32	72	10	710	718
磨製	磨製石斧						5		3		8	8	
礫	たたき石		1	1		1	6	7	2	3	19	20	
	すり石					1	2	1			4	4	
	台石							1			1	1	
	加工痕のある礫					7	4	1			12	12	
	小計		1	1		2	15	13	3	3		36	37
礫					11	88	134	7	6	1	247	247	
合計		2	7	9	47	53	361	403	42	84	11	1,001	1,010

表IV-4 掲載土器類一覧

押図	掲載 番号	図版	出土地点			点数		時期 分類	器種または 破片部位	計測値 (cm)			備考	
			遺構名 グッド名	遺物 番号	層位	小計	合計			器高	口径	底径		
IV-3	1	3	H2	9	覆土1	1	1	IV a	胴部	-	-	-		
			T-17	106	Ⅲ	1								
			#	112	IV	3								
IV-5	1	5	#	133	#	4	54	IV a	深鉢	(32.1)	(20.3)	9.3		
			#	136	#	43								
			#	139	#	1								
			#	140	#	2								
			#	140	#	2								
#	2	#	Q-15	32	IV	4								
			#	33	#	3								
			#	51	#	1								
			#	52	#	6								
			#	57	#	1								
			#	58	#	1								
			Q-16	18	Ⅲ	2								
			#	70	IV	10	34	IV a	深鉢	(19.5)	(19.8)	-	底部欠損	
			R-14	11	I	1								
			#	67	IV	1								
			R-15	27	#	1								
			#	69	#	1								
			#	81	#	1								
			#	82	#	1								
			#	3	#	S-17	38	IV	4					
#	44	#				2								
#	87	#				3								
#	91	#				1								
T-16	70	#				1								
#	72	#				1								
T-17	43	Ⅲ				3								
#	102	#				24	69	IV a	深鉢	(30.3)	(21.5)	(8.5)		
#	105	#				1								
#	133	IV				2								
#	136	#				1								
#	144	Ⅲ				3								
#	145	#				21								
#	181	IV				1								
#	4	#				U-16	1	I	1					
			S-17	36	IV	3	21	IV a	口縁～胴部	(10.5)	16.7	-		
			#	38	#	6								
			#	85	#	5								
			#	87	#	6								
#	5	#	#	95	#	1								
			T-17	43	Ⅲ	2								
			#	110	IV	5	12	IV a	口頸部	-	(14.8)	-	把手付き	
			#	112	#	3								
			#	133	#	1								
IV-6	6	6	#	136	#	1								
			34	表面採集	1	2	Ⅲ a	口縁～胴部	-	-	-			
			35	#	1									
#	7	#	S-18	57	風割木灰	1	4	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
			#	83	#	3								
			#	111	Ⅲ	3								
#	8	#	Q-16	23	IV	5								
			#	39	#	2	14	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
			#	55	#	1								
			#	51	Ⅲ	2								
			#	54	IV	1								
#	9	#	R-15	34	Ⅲ	1	3	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
			#	38	IV	2								
			R-14	4	Ⅲ	1								
#	10	#	#	5	#	1	3	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
			#	1	#	1								
			#	16	3	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	12	#	S-18	31	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			#	38	Ⅲ	1								
			T-18	32	Ⅲ	1	3	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
#	13	#	#	121	#	2	3	IV a	口縁部	-	-	-		
			T-18	57	風割木灰	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			#	133	IV	1								
#	15	#	U-17	2	横長	1	3	IV a	口縁～胴部	-	(11.2)	-		
			#	15	I	1								
			#	15	I	1								
#	16	#	Q-16	69	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			T-17	110	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			#	110	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			T-16	11	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			T-18	134	風割木灰	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			#	18	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			U-18	55	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			#	21	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			U-16	10	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			S-17	93	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-		
			IV-7	23	7	S-18	80	風割木灰	1	1	IV a	口縁部	-	-
T-18	5	I				1	5	IV a	口縁～胴部	-	-	-		
#	31	Ⅲ				2								
#	54	風割木灰				1								
#	54	風割木灰				1								

種別	掲載番号	図版	出土地点		点数		時期分類	器種または破片部位	計測値 (cm)			備考	
			遺構名 グリッド番号	遺物番号	層位	小計			合計	器高	口径		底径
IV-7	24	7	T-18	81	撥乱	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	25	#	T-19	23	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	26	#	T-16	3	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	27	#	T-18	64	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	28	#	U-18	24	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	29	#	S-17	36	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	30	#	S-17	36	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	31	#	#	42	皿	2	3	IV a	口縁部	-	-	-	
#	32	#	U-17	58	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	33	#	Q-16	69	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	34	#	S-18	53	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	35	#	S-17	42	皿	3	3	IV a	口縁部	-	-	-	
#	36	#	Q-15	35	皿	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	37	#	Q-16	50	皿	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	38	#	U-17	111	IV	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	39	#	#	116	#	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	40	#	S-18	81	風筒木灰	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	41	#	T-19	62	風筒木灰	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	補修孔
#	42	#	U-17	36	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	43	#	T-16	69	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	44	#	R-14	10	I	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	45	#	T-18	33	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	46	#	T-17	110	IV	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	47	#	T-17	28	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	48	#	#	40	#	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	49	#	#	110	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	50	#	#	112	#	2	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	51	#	T-18	168	撥乱	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	52	#	T-17	110	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	補修孔
#	53	#	T-18	121	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	54	#	Q-16	69	IV	2	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	55	#	Q-15	57	IV	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	56	#	Q-16	54	#	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	57	#	S-17	93	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	58	#	Q-16	40	IV	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	59	#	T-18	32	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	60	#	S-17	3	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	61	#	Q-16	50	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	62	#	T-17	110	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	63	#	U-17	111	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	64	#	T-16	2	H	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	65	#	#	3	IV	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	66	#	#	12	皿	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	67	#	#	39	H	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	68	#	T-17	136	IV	8	8	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	69	#	#	181	#	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	70	#	U-16	9	撥乱	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	71	#	U-17	31	撥乱	1	1	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	72	#	#	37	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	73	#	#	64	撥乱	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	74	#	U-17	43	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	75	#	Q-15	8	H	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	76	#	#	9	#	1	2	IV a	口縁部	-	-	-	
#	77	#	T-18	60	IV	1	3	IV a	口縁~胴部	-	-	-	65と同一個体
#	78	#	#	122	皿	1	3	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	79	#	#	149	IV	1	3	IV a	口縁部	-	-	-	
#	80	#	T-17	47	皿	1	4	IV a	底部	-	-	5.8	
#	81	#	#	116	IV	3	4	IV a	口縁部	-	-	-	
#	82	#	S-17	42	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	83	#	T-17	40	皿	1	3	IV a	口縁部	-	-	-	
#	84	#	#	112	IV	2	3	IV a	口縁部	-	-	-	
#	85	#	T-17	40	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	86	#	U-16	10	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	87	#	T-17	109	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	88	#	T-17	117	IV	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	89	#	S-19	18	風筒木灰	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	90	#	T-18	27	皿	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
#	91	#	#	60	IV	2	7	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	92	#	#	149	#	1	7	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	93	#	#	122	皿	3	7	IV a	口縁~胴部	-	-	-	
#	94	#	S-18	54	IV	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
#	95	#	R-15	37	IV	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
#	96	#	S-17	44	皿	2	3	IV a	胴部	-	-	-	
#	97	#	S-18	20	風筒木灰	1	3	IV a	胴部	-	-	-	



採回 種目	掲載 番号	図版	出土地点			点数		時期 分類	器種または 破片部位	計測値 (cm)			備考
			遺構名 グリッド名	遺物 番号	層位	小計	合計			器高	口径	底径	
IV-8	77	9	S-17	87	IV	1	2	IV a	胴部	-	-	-	
			T-18	190	攪乱	1							
#	78	#	T-18	99	攪乱	2	2	IV a	胴部	-	-	-	
IV-9	79	#	U-18	6	II	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
			U-17	69	攪乱	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
#	80	#	T-17	106	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	
#	82	#	T-19	78	攪乱	1	1	IV a	底部	-	-	-	
#	83	#	S-17	91	IV	1	1	IV a	底部	-	-	-	5.8
			Q-15	74	III	1							
#	84	#	Q-16	24	IV	2	5	IV a	底部	-	-	-	7.0
			#	55	#	1							
			#	72	#	1							
#	85	#	U-19	13	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	7.0
#	86	#	T-19	71	攪乱	1	1	IV a	底部	-	-	-	6.0
#	87	#	R-15	58	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	3.9
#	88	#	T-16	16	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	3.1
#	89	#	S-17	6	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	5.8
#	90	#	T-17	39	IV	1	1	IV a	底部	-	-	-	8.3
#	91	#	T-17	47	III	1	1	IV a	底部	-	-	-	5.8
#	92	#	T-16	16	III	5	5	IV a	底部	-	-	-	6.7
#	93	#	T-18	167	攪乱	1	1	IV a	底部	-	-	-	7.2
			T-18	38	III	1							
#	94	#	#	127	#	3	9	V	口縁~胴部	-	17.4	-	95と同一個体
			#	128	#	4							
			#	183	IV	1							
#	95	#	T-18	128	III	3	6	V	底部	-	-	-	7.0
			#	131	#	3							
#	96	10	S-18	11	攪乱	1	1	V	口縁部	-	-	-	
			T-17	14	I	1							
#	97	#	T-19	8	II	1	3	V	口縁部	-	-	-	
			U-17	91	I	1							
#	98	#	U-18	4	II	1	1	-	土製品	-	-	-	赤彩
#	99	#	Q-16	49	III	1	1	IV a	細砂土器	-	-	-	1.5

表IV-5 掲載石器一覽

採回 種目	掲載 番号	図版	出土地点			器種 分類	石材	計測値				備考
			遺構名 グリッド名	遺物 番号	層位			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
IV-3	2	3	H-2	5	床面直上	たたき石	凝灰岩	9.9	2.8	2.7	85.0	
#	3	#	H-2	1	床面直上	スクレイパー	珪質頁岩	6.1	6.1	1.7	67.0	
IV-12	2	#	U-18	41	IV	石織	珪質頁岩	3.0	1.5	0.4	0.9	
			T-17	155	IV	石織	頁岩	(3.0)	1.0	0.5	(1.1)	
#	3	#	T-17	156	IV	石織	頁岩	2.4	1.1	0.5	0.9	
#	4	#	U-17	71	攪乱	石織	頁岩	3.7	1.5	0.4	1.6	アスファルト付
#	5	#	Q-15	63	IV	石織	頁岩	(3.9)	1.4	0.6	(1.9)	アスファルト付
#	6	#	T-17	174	IV	石織	頁岩	(4.4)	1.6	0.5	(2.4)	アスファルト付
#	7	#	S-18	65	攪乱	石織	黒曜石	(5.4)	3.0	1.4	(17.5)	
#	8	#	R-15	13	III	石織	頁岩	4.6	2.5	0.9	7.2	
#	9	#	T-18	40	III	石織	頁岩	7.4	4.9	2.0	54.2	
#	10	#	T-16	33	III	スクレイパー	頁岩	6.7	5.3	2.1	52.8	
#	11	#	S-17	28	IV	スクレイパー	頁岩	6.2	6.0	1.9	52.9	
#	12	#	S-17	25	IV	スクレイパー	頁岩	9.0	5.6	2.5	111.7	
#	13	#	S-18	89	風割木版	スクレイパー	頁岩	9.0	4.8	2.0	80.2	光沢あり
#	14	#	T-17	32	III	スクレイパー	頁岩	6.0	5.7	1.3	37.5	
IV-13	15	#	T-17	73	III	スクレイパー	珪質頁岩	5.7	5.1	2.0	53.1	
			U-16	13	III	スクレイパー	頁岩	6.9	5.5	1.6	55.1	
#	17	#	T-18	103	III	スクレイパー	頁岩	5.2	5.4	2.6	30.7	
#	18	#	U-18	15	IV	スクレイパー	頁岩	4.2	6.1	1.7	27.9	
#	19	#	T-18	104	III	スクレイパー	頁岩	4.1	8.7	1.6	59.3	
#	20	11	T-18	21	攪乱	スクレイパー	頁岩	5.7	4.5	1.4	21.3	
#	21	#	T-17	126	III	スクレイパー	頁岩	7.0	(4.5)	2.0	(43.2)	
#	22	#	T-18	71	IV	石織	頁岩	5.0	4.5	2.6	44.8	
IV-14	23	#	U-17	78	IV	磨製石斧	片岩	(9.7)	4.4	2.6	(164.0)	
			T-18	84	攪乱	磨製石斧	不明	(10.8)	5.1	3.0	(280.4)	
#	25	#	R-15	72	IV	磨製石斧	不明	(6.8)	4.1	3.2	(103.6)	
#	26	#	S-18	17	攪乱	たたき石	泥岩	(7.4)	7.9	7.2	(466.0)	赤色顔料付着
#	27	#	U-17	72	攪乱	たたき石	砂岩	18.1	8.3	6.7	1420.0	
#	28	#	T-17	74	III	たたき石	泥岩	14.2	4.3	2.6	231.3	
#	29	#	S-19	15	風割木版	たたき石	砂岩	11.3	7.9	3.8	480.0	
#	30	#	S-18	24	風割木版	たたき石	砂岩	10.4	13.5	5.9	1060.0	
IV-15	31	#	U-18	42	IV	すり石	砂岩	8.5	16.2	4.6	820.0	
			U-19	15	III	すり石	凝灰岩	8.9	(10.9)	4.0	(450.0)	
#	33	#	S-17	63	III	加工後のたき石	凝灰岩	4.2	14.5	2.0	119.3	

表IV-6 土器類集計(2か年度分)

分類	出土地点										遺構										包含層等					合計		
	H1	H2	P1	P2	P3	P4	P5	P7	P9	SF3	SF9	SP1	BP1	BP2	CP1	CS1	小計	I層	II層	III層	IV層	V層	雑草層	攪乱	排土		断面埋	小計
II群	破片部位										遺構										包含層等					合計		
	口縁部										遺構										包含層等							
	胴部										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
III群	胴部										遺構										包含層等					合計		
	底部										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
IV群	口縁部										遺構										包含層等					合計		
	胴部										遺構										包含層等							
	底部										遺構										包含層等							
	不明										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
V群	口縁部										遺構										包含層等					合計		
	胴部										遺構										包含層等							
	底部										遺構										包含層等							
	不明										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
VI群	口縁部										遺構										包含層等					合計		
	胴部										遺構										包含層等							
	底部										遺構										包含層等							
	不明										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
未分類	口縁部										遺構										包含層等					合計		
	胴部										遺構										包含層等							
	底部										遺構										包含層等							
	不明										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
土製品	袖珍土器										遺構										包含層等					合計		
	優成粘土塊										遺構										包含層等							
	土製品										遺構										包含層等							
	小計										遺構										包含層等							
合計	290	6	7	1	13	33	3	1	3	3	2	9	117	218	121	1	828	452	918	4,112	5,135	1	382	430	7	289	111,726	12,651





## V 矢不來10遺跡

### 1 遺構とその出土遺物

検出された遺構は、Tピット1基である(TP1)。この他、遺物の集中地点として、土器破片集中(CP1)、フレイク・チップ集中(CF1)、礫集中(CS1)があり、便宜的に本節で扱うこととした。

#### (1) Tピット

TP1 (図V-2、表V-1、カラー図版4、図版13)

位置 H-43区(標高67.2m前後の平坦面) 規模 2.68×0.54/2.66×0.22/1.34m

調査 V層上面を精査中細長く黒いしみを検出した。半截したところ底に向かって若干狭くなるTピットであることが判明した。IV層下位からV層上面が構築面と思われる。遺物は出土していない。

覆土 覆土は9枚に分層した。1～3層、4層以下に大きく分けられ、4層以下はⅢ層とV層が交互に入っている状況である。1～3層は主にⅢ層の堆積で、4層以下より比較的新しい堆積である。いずれの層も自然堆積によるものと考えている。

形態 平面形態は細長く坑底面の長短比は約12:1で、「苫土分類基準」(苫土牧市教育委員会1986)のA1型にあたる。底部に杭穴はなく、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸両端の下半分はオーバーハンクしている。

時期 不明であるが、縄文時代のもものと推定できる。(中山昭大)

#### (2) 土器破片集中

CP1 (図V-3、表V-1・5、図版14・16)

位置 K-19・20区 範囲 1.26×0.59m

調査 表土除去後のK-19区で、数点の土器片が見つかった。付近を掘り下げると、同一個体とみられる胴部・底部の破片がややまとまって出土したことから、土器破片集中として扱った。破片の周囲では、径1cm以下の炭化木片の散らばりが認められている。出土層位はⅢ層である。

掲載遺物 1はCP1として取り上げた破片により、部分的に復原された深鉢である。底部から胴部にかけては筒形を呈し、胴部の中位から大きく開く器形とみられる。胴部には、斜行縄文地に横走沈線が2条認められる。外面の無文部分と内面はミガキ調整により平滑に仕上げられ、やや光沢を生じている。

時期 縄文時代後期中葉である。

#### (3) フレイク・チップ集中

CF1 (図V-3、表V-1・2・6、カラー図版4、図版16)

位置 K-38区 範囲 1.72×(1.02)m

調査 K-38区のⅢ層中位で、フレイク・チップの集中する状況が認められたため、フレイク・チップ集中として扱った。ほとんどが長さ2cm以下で、上下に数センチの高低差をもって検出されている。

CF1として取り上げた遺物は、フレイク・チップ215点(107.4g)、石匙片2点(54.9g)、Uフレイク3点(1.9g)、礫片1点(7.0g)、土器片1点の合計222点で、土器片を除いた総重量は1712gを量る。黒曜石は1点のみで、他は全て頁岩である。頁岩には珪質のものも見られることから、原石の異なるフレイク・チップもあると考えられる。また、図示した石匙と色調等が類似するものも含まれている。土器はI群で、微隆起線文が施されているが、小破片のため掲載していない。

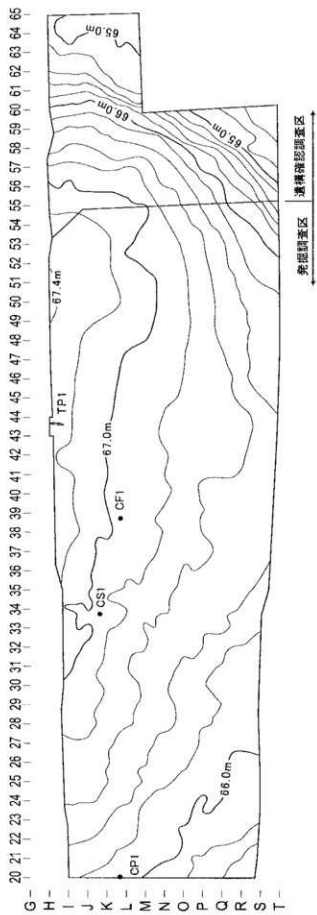
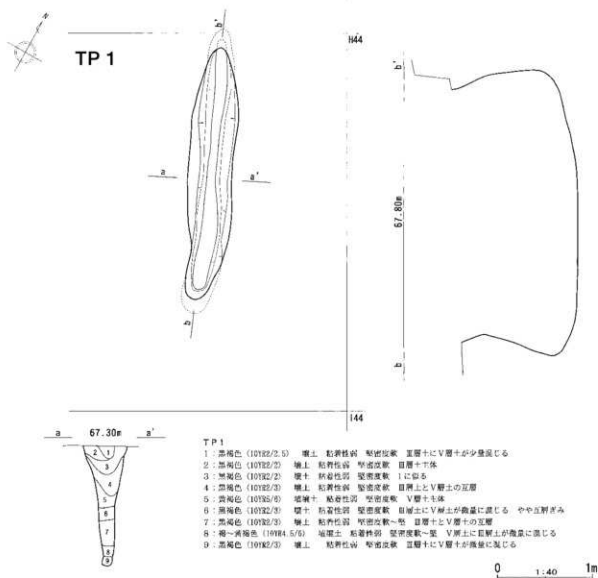


図 V - 1 遺構位置図



図V-2 TP 1

**掲載遺物** 2は石匙である。CF 1平面図中の①と②が接合している。片面全面と裏面の周縁に二次加工が施される。本遺跡の他の石匙と比べて幅広ではあるが、刃部の形態が比較的類似するものがあり(図V-13-17)、石匙と分類した。

**時期** 出土遺物から、縄文時代早期後半の可能性がある。

#### (4) 礫集中

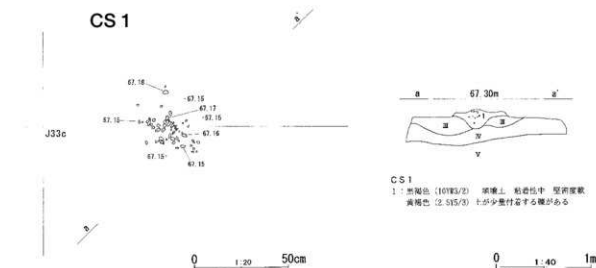
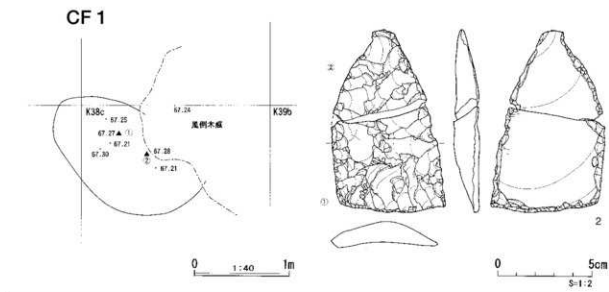
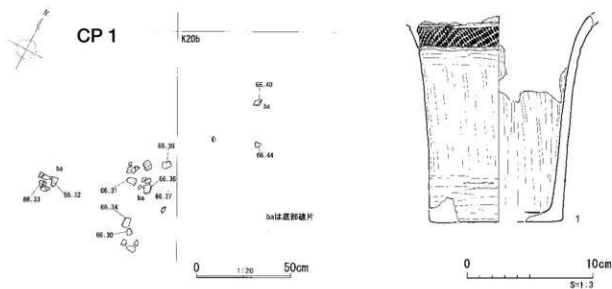
CS 1 (図V-3、表V-1・2、カラー図版4、図版14・16)

**位置** J-33区 **範囲** 0.39×0.26m

**調査** J-33区のⅢ層中位で、細礫や小礫の集中する状況が認められたため、礫集中として扱った。ほとんどが長径5cm以下で、形状は垂円・垂角のものが主体である。砂岩や泥岩が多い。集中部分の中央から東側を半載したところ、礫は上下に約20cmの高低差をもって出土した。1層は礫の混じる土で周囲のⅢ層より軟らかく、黄褐色土が所々に礫に付着するように見られた。CS 1として取り上げた礫は583点で、重量1,350gを量る。

**時期** 不明である。

(山中文雄)



図V-3 CP 1、CF 1、CS 1

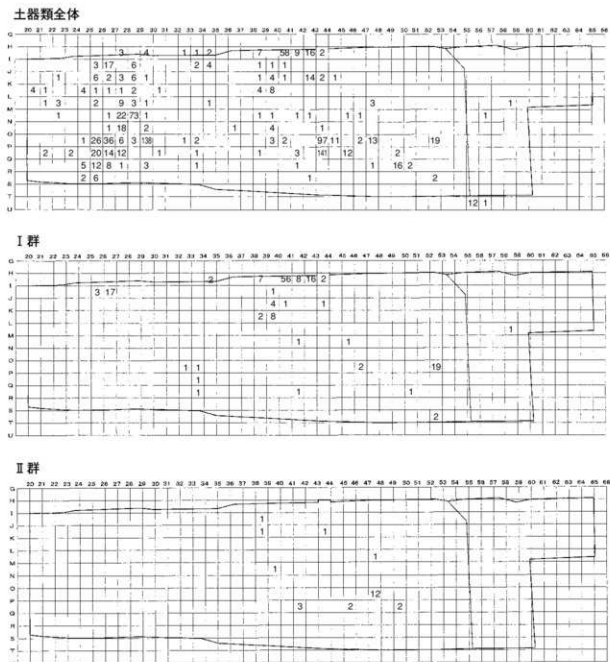


## 2 包含層出土の遺物

包含層等の遺物は、土器類1,008点、石器類791点、金属製品7点、合計1,806点を数える。数点の遺物しか出土しないグリッドが大半で、Ⅲ章で触れた東地区（40～55ライン）の北東側では、遺物のないグリッドも多い。包含層の状態は概ね良好であったが、中央地区（30～40ライン）の南側（おおよそOライン以南）は、耕作等のため失われていた。

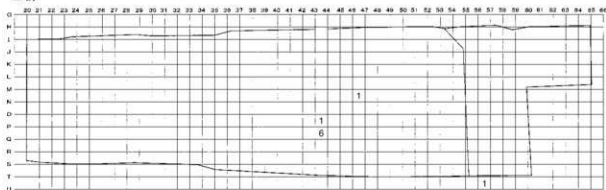
### (1) 土器類

土器類1,008点の内訳は、土器1,006点、土製品2点である。土器はⅣ群（縄文時代後期）が495点を数え、土器全体の49.2%を占める。折り返し状の口縁や、縄線文の施されるものなどがあり、後期前葉のⅣ群a類が主体とみられる。調査区西側の24～31ラインにかけてまとまりがある。また点数は少ないものの、後期中葉のⅣ群b類が、前節に記載したC P 1のあるK-20区周辺で出土している。

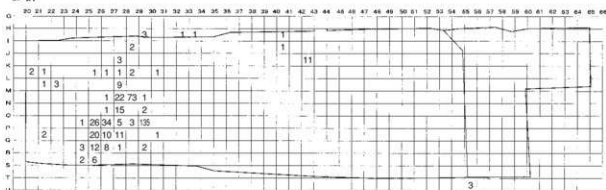


図V-4 土器類分布図(1)

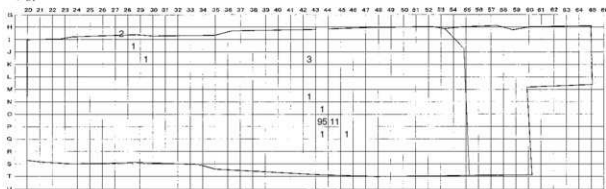
### Ⅲ群



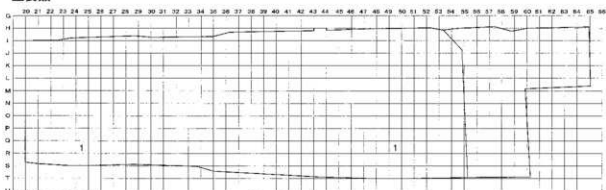
### Ⅳ群



### Ⅴ群



### 土製品



図V-5 土器類分布図(2)

次いでⅠ群(縄文時代早期)161点、Ⅴ群(縄文時代晩期)119点の順となり、Ⅱ群(縄文時代前期)は26点、Ⅲ群(縄文時代中期)は9点である。Ⅰ群は、微隆起線文や絡条体圧痕文等の施される、早期後半のⅠ群b類のみである。調査区中央の北側に比較的まとまっている。Ⅴ群は工字文の施された晩期後葉のⅤ群c類が、調査区の中央付近から得られている。その他、Ⅳ群かⅤ群とみられるもの21点、Ⅴ群かⅥ群とみられるもの68点、時期分類が困難で未分類とした破片157点がある。土製品は2点とも焼成粘土塊である。

#### Ⅰ群(図V-6、表V-5、図版17)

1は口縁部から胴部にかけての破片である。絡条体圧痕文が施され、口唇部は尖りぎみである。2・3は底部の破片で、どちらも底部端が丸みを帯びる。2は絡条体圧痕文、3は微隆起線文間に斜行縄文と短縄文が施される。いずれもⅠ群b類に相当する。

#### Ⅱ群(図V-6、表V-5、図版17)

4は胴部の破片で、節の大きな縄文が施される。胎土には繊維痕が顕著に見られ、砂粒を多く含む。5は口縁部の破片である。2条1組の縄線文が施され、口唇部には縄の押圧が連続する。6は胴部の破片である。外面は縦横の擦痕が見られ、内面はミガキ調整がなされる。5・6とも繊維痕が顕著に観察される。4はⅡ群a類、5・6はⅡ群b類に相当する。

#### Ⅲ群(図V-6、表V-5、図版17)

7は口縁部突起の破片で、縄の押圧された把手状の貼付がある。口唇部内面は肥厚し、口唇部直下の内外面には縄が押圧される。内面には横方向の貼付がある。8は胴部の破片で、結束第1種羽状縄文が施される。内面はミガキ調整により平滑に仕上げられている。どちらもⅢ群a類に相当する。

#### Ⅳ群(図V-6、表V-5、図版17)

9~15は口縁部の破片である。9・12は口縁部に段がある。9は波状の口縁で、L R原体の回転方向を変えることによって、羽状縄文が施される。10は2条の縄線文が施される。11・13・14は折り返し状の口縁である。11は折り返し後にL R原体の横回転による縄文が施される。13・14は折り返し部分が無文である。13は0段r原体の捻糸文が、折り返しより先に施される。14は折り返し部分と器面との段差が顕著である。15はL R原体による斜行縄文地に沈線文が施される。口唇部にも縄文がみられる。

16~20は胴部の破片である。16は縄線文の加えられた貼付帯が付される。拓影図では判然としていないが、貼付帯の上側と器面との境目には縄文、破片下部には縦走する縄文が施される。17は網目状捻糸文が施される。18は中空の工具による円形刺突文が施される。19は1段R原体による横走ぎみの捻糸文が施される。20は内面にも縄文が施される。

21~23は底部の破片である。21は底部の中央がわずかにくぼむ。22はL R原体の縦回転による縄文が施される。23は底部端が張り出し、横走ぎみの縄文が施される。

24は胴部の破片である。斜行縄文地に上下を繋げた横走沈線が施される。

25は胴部の破片で、磨消縄文が施される。破片上部の爪形文は下方からの刺突によるものである。

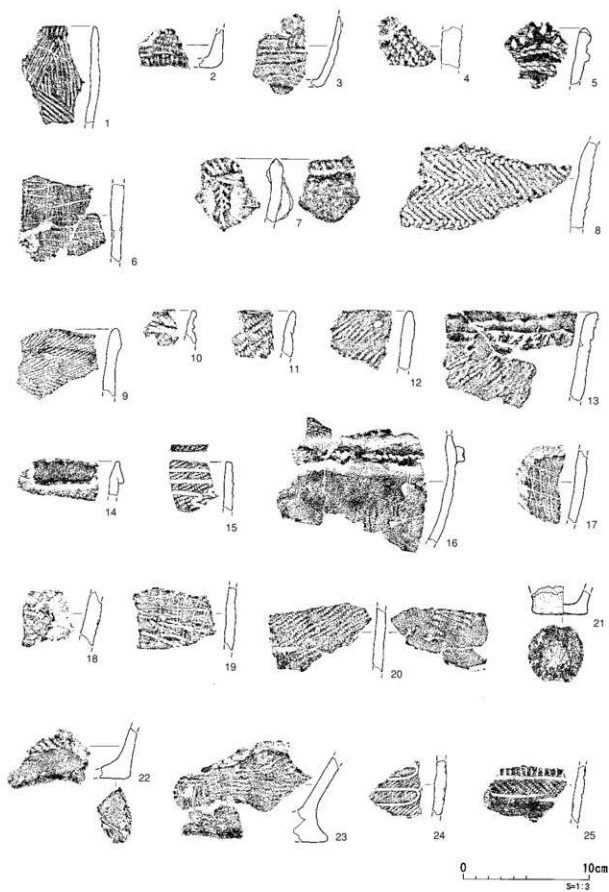
9~23はⅣ群a類、24はⅣ群b類、25はⅣ群c類に相当する。

#### Ⅳ・Ⅴ群(図V-7、表V-5、図版17)

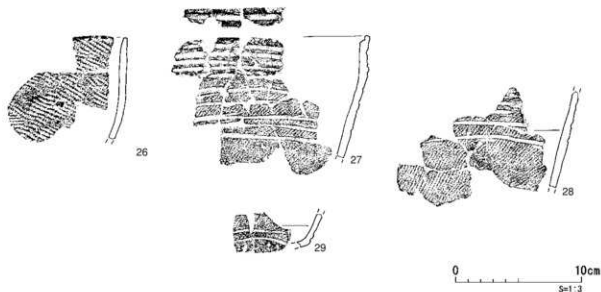
26は口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部は平坦で、器面にはR L原体の横回転による斜行縄文が施される。Ⅳ群またはⅤ群とみられる。

#### Ⅴ群(図V-7、表V-5、図版17)

27~29は、O-43区付近から出土した同一個体の破片である。口縁部は直立ぎみで、口唇部内面は段状に作り出されている。胴部の地文はL R原体の横回転によるもので、口縁部から胴部上半にかけては横位連続工字文が施される。底部からの立ち上がりには横走沈線が2条引かれる。内面胴部は、炭化物の付着や器面の黒色化が顕著に認められる。器形は鉢であろう。Ⅴ群c類に相当する。



図V-6 包含層出土の土器(1)



図V-7 包含層出土の土器(2)

## (2) 石器類

石器類791点の内訳は、剥片石器群692点、磨製石器群28点、礫石器群23点、礫48点である。

剥片石器群は、石鏃14点、石錐1点、石匙17点、石鏡2点、スクレイパー50点、Rフレイク58点、Uフレイク76点、石核8点、フレイク677点、剥片石器原石2点、剥片石器片5点に分類される。石鏃は無茎鏃8点、有茎鏃5点、未成品1点である。無茎鏃には、柳葉形1点、三角形凹基5点、三角形平基2点がある。有茎鏃にはアスファルトの付着するものがある。石匙の形態は、横型が1点あるが、他の16点は縦型である。スクレイパーは、刃部が直線的なものや弧状のものがあり、数点の刃部に光沢が認められる。剥片石器群に用いられる石材は、珪質のものも含めて頁岩が大半である。黒曜石は29点あり、分類別に示すと石鏃3点(三角形凹基2点、有茎凸基1点)、スクレイパー1点、Rフレイク2点、Uフレイク4点、フレイク19点である。

磨製石器群は、磨製石斧が28点ある。完形品はなく、刃部のある破片19点、基端部のある破片3点等がある。石材は主に泥岩が用いられる。

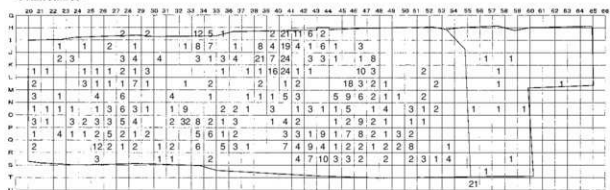
礫石器群は、たたき石8点、すり石4点、砥石3点、台石、石皿が各1点、加工痕のある礫6点に分類される。たたき石は、扁平礫の側縁に使用痕のあるものが多い。すり石には断面三角形のものがある。礫石器群に用いられる石材は、砂岩等である。

三つの石器群のうち、定形的とされる石器について点数が多い順に挙げると、スクレイパー50点、磨製石斧28点、石匙19点、石鏃14点、たたき石8点、すり石4点、砥石3点、石鏡2点、石錐、台石、石皿各1点となる。いずれも散発的な出土であるが、石匙はI群土器、磨製石斧はIV群土器の分布と類似する。また、CF1のあるK-38区から北側にかけてフレイクがやや多いが、これもI群土器の分布と類似する。

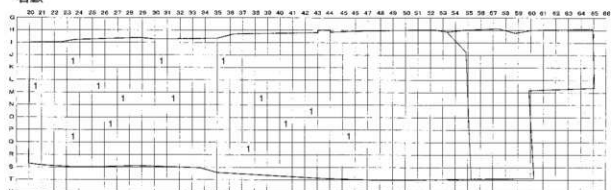
**剥片石器群**(図V-13・14、表V-5、図版18)

**石鏃** 1～6は無茎鏃で、1は柳葉形、2・3は三角形凹基、4～6は三角形平基である。4・6は基部がわずかに内湾する。7～11は有茎鏃で、7・8は凸基、11は凹基である。10は基部から茎部にかけてアスファルトが付着する(網状部分)。11は一方の縁辺に2か所の抉りがある。石材は1・3～7・9～11が頁岩、2・8が黒曜石である。2の黒曜石には1mm以下の球類の列が認められる。

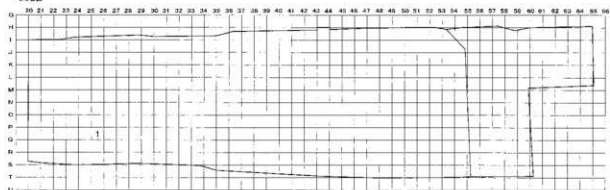
### 石器類全体



### 石鏃



### 石錐

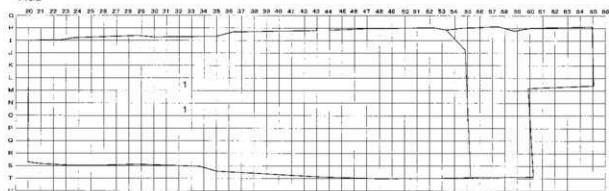


### 石匙

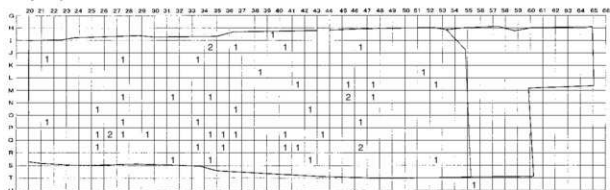


図V-8 石器類分布図(1)

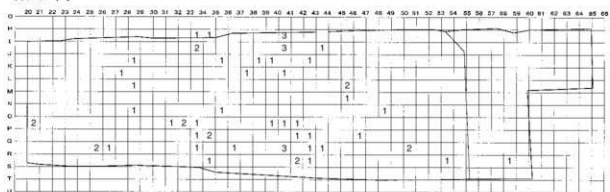
## 石筥



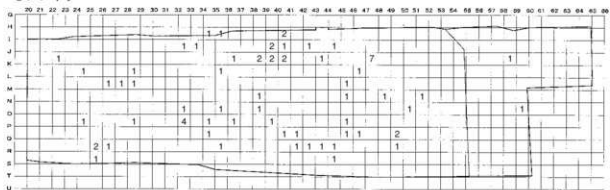
## スクレイパー



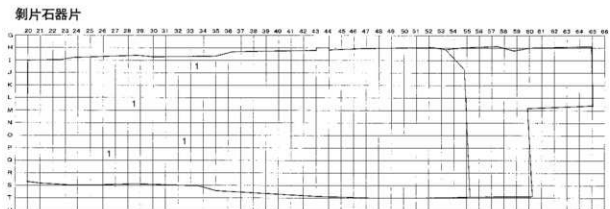
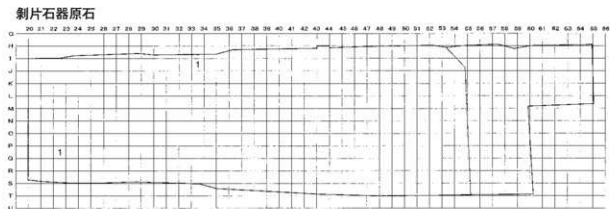
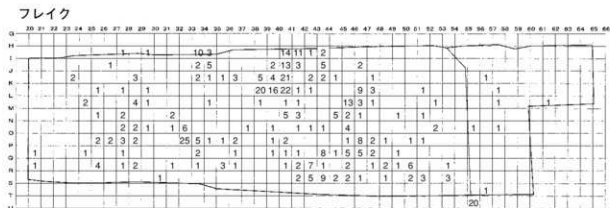
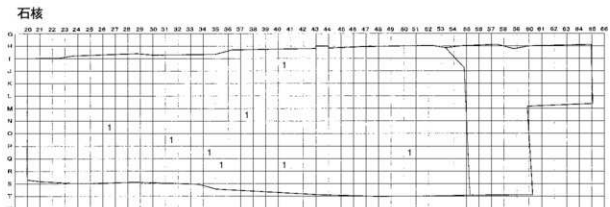
## Rフレイク



## Uフレイク



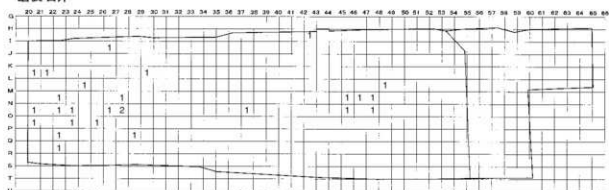
図V-9 石器類分布図(2)



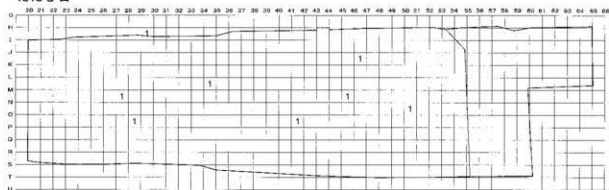
図V-10 石器類分布図(3)



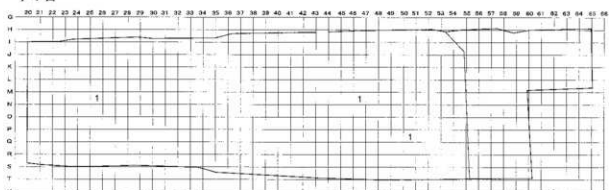
## 磨製石斧



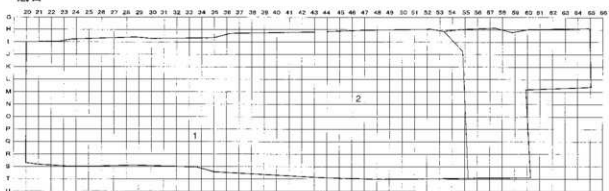
## たたき石



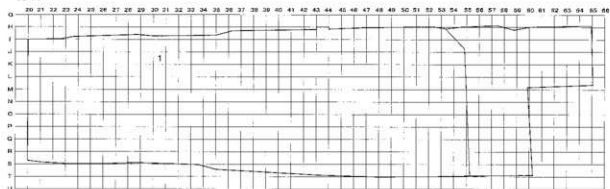
## すり石



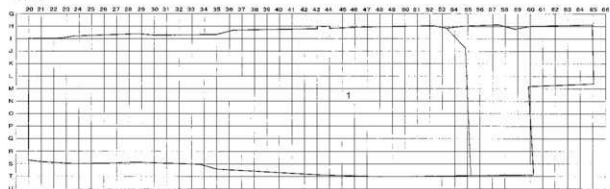
## 礫石



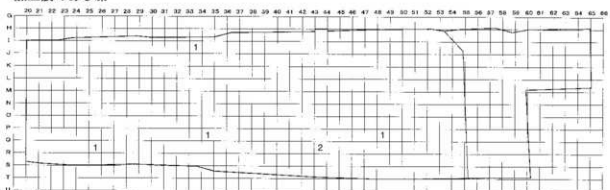
台石



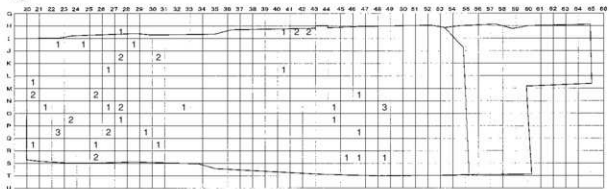
石皿



加工痕のある礫



礫



図V-12 石器類分布図(5)

**石錐** 12は錐部が磨耗して丸みを帯びる。石材は流紋岩とみられる。

**石匙** 13～17は縦型である。いずれも片面全面加工で、遠端部の縁辺が直線的もしくは切出し形を呈する。二次加工は裏面の右縁辺にも施される。側面から見ると、15のみ直線的で、他の4点は湾曲している。18は横型で、表面の縁辺に二次加工が施される。石材は全て頁岩である。

**石篋** 19は片面全面と裏面左右の縁辺に二次加工が施される。20は両面全面加工である。石材はどちらも頁岩である。

**スクレイパー** 21は柳葉形を呈する。片面全面と裏面を全周する二次加工が施される。22・23は素材の1縁辺に直線的な刃部がある。23には自然面が見られる。24～26は刃部が弧状である。24・25は表面右側の縁辺に二次加工が施される。25の上部は、縁辺の両面にも二次加工が施される。26は片面全周と裏面右側の縁辺に二次加工が施される。弧状の刃部には両面に光沢が認められる(網伏せ部分)。27～29は刃部が2縁辺以上にある。27の二次加工は両縁辺とも急角度で、表面右側の縁辺には挟りがある。28は縁辺の全周に二次加工が施され、切出し形を呈する。29は裏面のほぼ全周に二次加工が施され、尖りぎみの形態となる。30・31は横長ぎみの剝片を素材としている。31は刃部の両面に光沢が認められる(網伏せ部分)。表面左側の縁辺には微細剝離痕が連続する。32は片面全面と裏面の左側縁辺に二次加工が施される。石匙の未成品かもしれない。石材は全て頁岩である。

**磨製石器群** (図V-15、表V-5、図版19)

**磨製石斧** 33～37は刃部の破片である。33・34は全面が研磨されている。33は両刃で、刃縁は円刃である。34は両刃で刃縁は偏刃である。35・36には打ち欠き痕が見られる。35は片刃で、刃縁は直刃である。36は両刃で、刃縁は偏刃ぎみである。37は敲打により整形される。両刃で、刃縁は円刃である。38は基端部のある破片で、全面が研磨されている。石材は33・36～38が泥岩、34が不明、35が片岩である。

**礫石器群** (図V-15・16、表V-5、図版19)

**たたき石** 39は礫の1稜と稜間に敲打痕が見られる。40は扁平楕円礫の中央や側縁に敲打痕が見られる。石材はどちらも砂岩である。

**すり石** 41は突出する稜にすり面が認められる。すり面の両側縁には打ち欠き痕が見られる。石材は砂岩である。

**加工痕のある礫** 42・43は礫の断面が三角形ぎみである。42は長軸端の両面に打ち欠き痕が見られる。43は幅広い方の端部の両面等に打ち欠き痕が見られ、稜線が一部で潰れている。突出する稜には敲打痕とすり面が認められる。すり面の幅は5mmを測る。44は稜片の縁辺片面に打ち欠き痕が見られる。石材は42が流紋岩、43・44が砂岩である。

**砥石** 45は扁平楕円礫の両面が滑らかで、表面はわずかにくぼむ。石材は凝灰岩である。

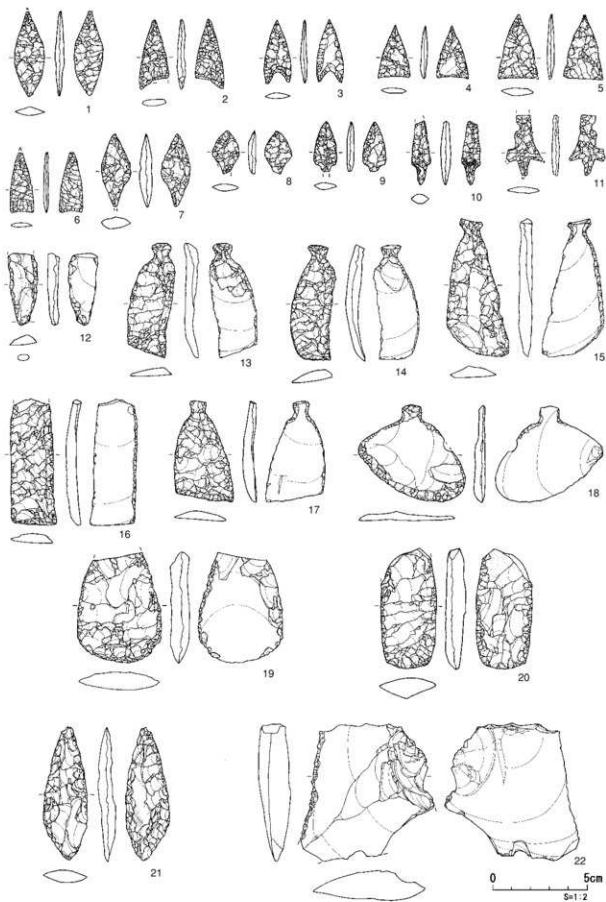
**石皿** 46は石皿の破片で、片面が滑らかである。石材は砂岩である。

**台石** 47は図示した面がやや平滑である。裏面には敲打痕とみられるものもあるが、表面の剝落がすすんでおり、使用痕との区別が判然としない。赤みを帯びており被熱しているかもしれない。石材は砂岩である。

### (3) 金属製品

**銃弾** (図V-16、表V-5、図版16・19)

鉛製の銃弾が7点出土している。掲載した48～50のように、いずれも椎実形の底部をくぼめたものである。前装施条銃の銃弾とみられることから、箱館戦争時のものであろう。(山中文雄)



図V-13 包含層出土の石器(1)

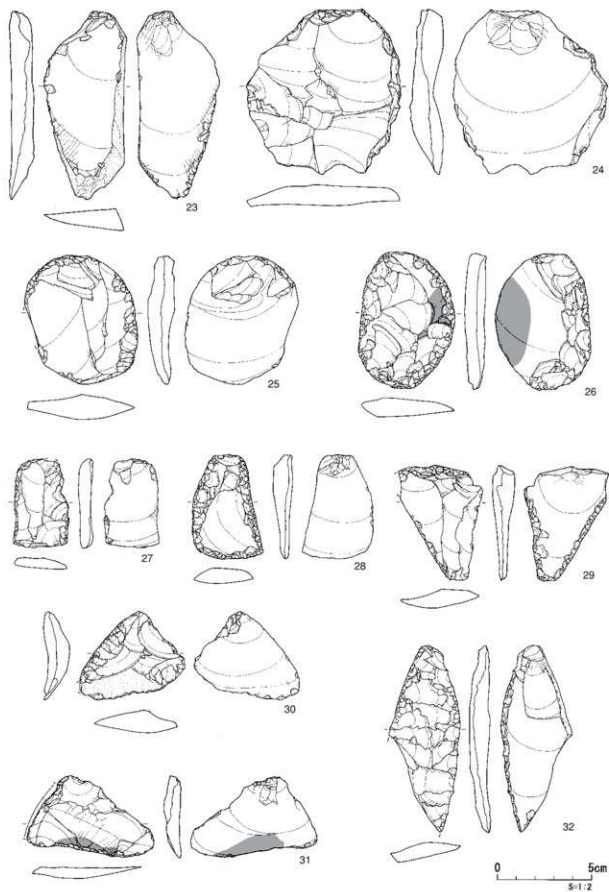


図 V-14 包含層出土の石器 (2)

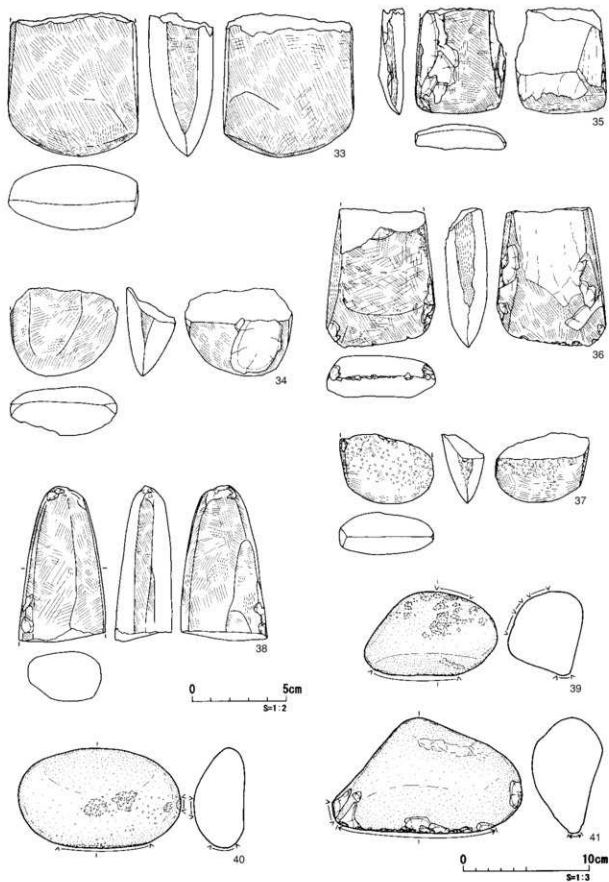
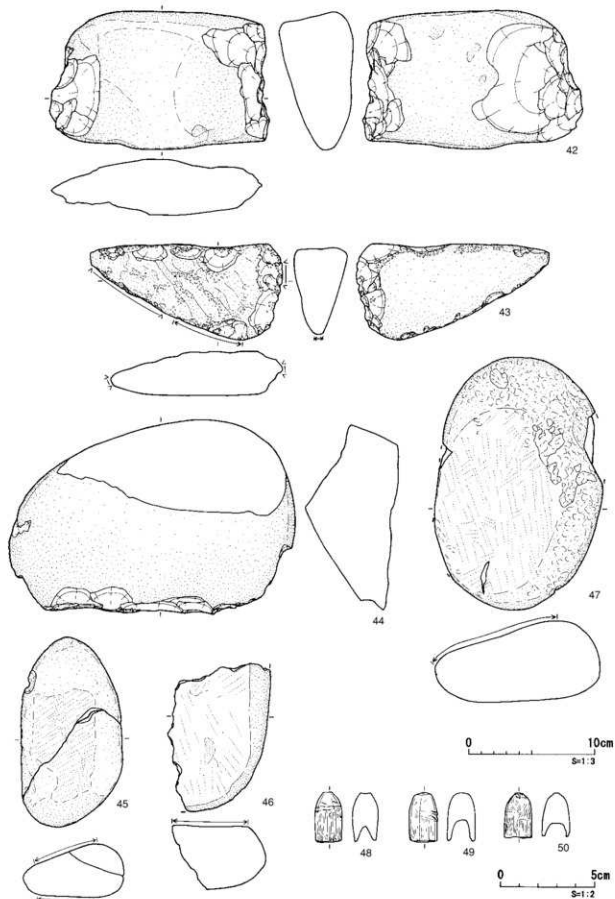


図 V - 15 包含層出土の石器 (3)



図V-16 包含層出土の石器(4)・金属製品

表V-1 遺構一覧

遺構名	遺構種類	位置	規模・範囲 (m)				備考	
			確認面		底面			深さ
			長径	短径	長径	短径		
TP1	Tピット	H-43区	2.68	0.54	2.66	0.22	1.34	
CP1	土器破片集中	K-19・20区	1.26	0.59	-	-	-	
CF1	フレイタ・チップ集中	K-38区	1.72	(1.02)	-	-	-	
CS1	礎集中	J-33区	0.39	0.26	-	-	-	

表V-2 CF1、CS1計測表

遺構名	計測項目	1.0cm以下	1.1~2.0cm	2.1~3.0cm	3.1~4.0cm	4.1~5.0cm	5.1~6.0cm	7.1~8.0cm	12.1~13.0cm	合計
CF1	点数	107	93	13	1		1			215
	重量 (g)	9.5	29.7	13.3	1.3		53.6			107.4
	点数割合 (%)	49.8	43.3	6.0	0.5		0.5			100.1
CS1	点数	146	314	89	25	5	2	1	1	583
	重量 (g)	33.7	326.4	410.8	234.0	91.5	53.2	42.8	157.7	1350.1
	点数割合 (%)	25.0	53.9	15.3	4.3	0.9	0.3	0.2	0.2	100.1

表V-3 土器類集計

分類\出土地点		遺構				包含層等								合計	
時期	破片部位	CP1		CF1	小計	I層	II層	III層	IV層	風倒木根	耕作土	攪乱	表面採集		小計
		III層	攪乱												
I群	口縁部					1	2	4						7	7
	胴部			1	1	14	22	105	3		2			146	147
	底部						4	3						7	7
	小計			1	1	15	28	112	3		2			160	161
II群	口縁部							1						1	1
	胴部					3	10	8			3	1		25	25
	小計					3	10	9			3	1		26	26
III群	口縁部							1	1					2	2
	胴部								2			5		7	7
	小計							1	3			5		9	9
IV群	口縁部					5	18	13						36	36
	胴部	38	7	45	45	69	156	120				43	1	389	434
	底部	7		7	7	4	10	4						18	25
	小計	45	7	52	52	78	184	137				43	1	443	495
IV-V群	口縁部						1	2						3	3
	胴部						1	18				2		21	21
	小計						2	20				2		24	24
V群	口縁部						1	1				11		13	13
	胴部					1	17	3				78		99	99
	底部											7		7	7
	小計					1	18	4				96		119	119
V-VII群	胴部											66		66	66
	底部											2		2	2
	小計											68		68	68
未分類	口縁部					7	1	5	1					14	14
	胴部					16	15	45	1	2	12	46		137	137
	底部							1			1	2		4	4
	不明										1	1		2	2
	小計					23	16	51	2	2	14	49		157	157
土製品	焼成粘土塊					1	1							2	2
合計		45	7	52	1	53	121	259	337	5	2	19	264	1,008	1,061



表V-4 石器類集計

分類\出土地点		遺構			包含層等								合計	
石器群	器種	CF I Ⅲ層	CS I Ⅲ層	小計	I層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	風割木炭	耕作土	攪乱	表面採集	小計	合計
剥片	石鏃				3	3	4	1			3		14	14
	石鏃										1		1	1
	石匙				1	3	6	1			6		17	17
	石筥	2		2		1	1						2	4
	スクレイパー				8	10	15	1			13	3	50	50
	Rフレイク						11	21	2		20	4	58	58
	ロフレイク	3		3	7	18	27	1	1	15	4		73	76
	石核				1	1	1				4	1	8	8
	フレイク	215		215	27	123	172	20	9	71	40		462	677
	剥片石磨原石						1				1		2	2
剥片石磨片					1	2				1		5	5	
小計		220		220	48	173	247	26	10	133	55		692	912
磨製	磨製石斧				2	10	11			1	3	1	28	28
礫	たたき石					1	6				1		8	8
	すり石				1		2						4	4
	砥石					2				1			3	3
	台石							1					1	1
	石皿								1				1	1
	加工痕のある礫				3	1	1			1			6	6
小計				5	4	10	1		2	1		23	23	
礫		1	583	584	8	17	23	1					48	632
合計		221	583	804	62	204	291	28	10	136	59	1	791	1,595

表V-5 掲載土器一覽

挿図	掲載番号	図版	出土地点		層位	点数		時期分類	器種または破片部位	計測値(cm)			備考
			遺構名 グリッド名	遺物番号		小計	合計			器高	口径	底径	
V-3	1	14	CP 1	Ⅱ	Ⅲ	35	43	IV b	深鉢	16.2	-	10.5	口縁→胴部欠損
			#	2	擾乱	6							
V-6	1	17	K-20	Ⅱ	Ⅲ	2	3	I b	口縁→胴部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	1							
#	2	#	H-42	Ⅱ	Ⅲ	2	4	II b	胴部	-	-	-	
			#	5	Ⅲ	2							
#	3	#	K-38	Ⅱ	Ⅲ	2	2	I b	底部	-	-	-	
			#	2	Ⅲ	2							
#	4	#	P-49	Ⅰ	Ⅲ	2	2	II a	胴部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	2							
#	5	#	M-39	Ⅰ	Ⅲ	1	1	II b	口縁部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	1							
#	6	#	L-47	Ⅰ	Ⅲ	3	4	II b	胴部	-	-	-	
			#	5	Ⅲ	1							
#	7	#	M-46	Ⅳ	Ⅲ	1	1	III a	口縁部	-	-	-	
			#	4	Ⅲ	1							
#	8	#	O-43	Ⅲ	擾乱	1	2	II a	胴部	-	-	-	
			#	24	Ⅲ	1							
#	9	#	P-26	Ⅱ	Ⅱ	2	2	IV a	口縁部	-	-	-	
			#	2	Ⅱ	2							
#	10	#	M-26	Ⅰ	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	1							
#	11	#	M-28	Ⅳ	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
			#	4	Ⅲ	1							
#	12	#	P-26	Ⅱ	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
			#	2	Ⅲ	1							
#	13	#	P-25	Ⅲ	Ⅲ	3	4	IV a	口縁→胴部	-	-	-	
			#	4	Ⅲ	3							
#	14	#	Q-25	Ⅴ	Ⅲ	1	1	IV a	口縁部	-	-	-	
			#	5	Ⅲ	1							
#	15	#	L-29	Ⅰ	Ⅲ	1	1	未分類	口縁部	-	-	-	
			#	10	Ⅲ	1							
#	16	#	O-29	Ⅱ	Ⅲ	1	4	IV a	胴部	-	-	-	
			#	20	擾乱	1							
#	17	#	M-27	Ⅲ	Ⅲ	2	2	IV a	胴部	-	-	-	
			#	7	Ⅲ	2							
#	18	#	H-29	Ⅳ	Ⅲ	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
			#	4	Ⅲ	1							
#	19	#	Q-29	Ⅲ	Ⅲ	1	1	IV a	胴部	-	-	-	
			#	3	Ⅲ	1							
#	20	#	M-28	Ⅲ	Ⅲ	2	2	IV a	胴部	-	-	-	
			#	7	Ⅲ	2							
#	21	#	J-27	Ⅳ	Ⅲ	1	1	IV a	底部	-	-	4.4	
			#	4	Ⅲ	1							
#	22	#	K-30	Ⅰ	Ⅲ	1	1	IV a	底部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	1							
#	23	#	M-28	Ⅱ	Ⅲ	1	3	IV a	底部	-	-	-	
			#	2	Ⅲ	2							
#	24	#	L-22	Ⅲ	Ⅲ	2	1	IV b	胴部	-	-	-	
			#	3	Ⅲ	2							
#	25	#	Q-25	Ⅰ	Ⅲ	1	1	IV c	胴部	-	-	-	
			#	1	Ⅲ	1							
#	26	#	J-25	Ⅱ	Ⅲ	1	3	IV・V	口縁部	-	-	-	
			#	2	Ⅲ	1							
#	27	#	O-43	Ⅲ	擾乱	3	12	V c	口縁部	-	-	-	28・29と同一個体
			#	6	擾乱	7							
#	28	#	O-44	Ⅲ	Ⅲ	1	8	V c	胴部	-	-	-	
			#	7	Ⅲ	1							
#	29	#	O-43	Ⅲ	擾乱	5	2	V c	底部	-	-	-	
			#	7	Ⅲ	5							
#	29	#	O-44	Ⅲ	Ⅲ	3	2	V c	底部	-	-	-	
			#	3	擾乱	2							

表V-6 掲載石器・金属製品一覧

神岡	掲載番号	図版	出土地点			器種分類	石材・材質	計測値				備考	
			遺構名 ツリッド名	遺物 番号	層位			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
V-3	2	14	C F 1	1	Ⅲ	石器	頁岩	9.7	6.1	1.3	(54.4)	接合	
V-13	1	18	L-20	2	Ⅱ	石鏃	球質頁岩	(4.6)	1.6	0.5	2.6		
	2	#	L-25	1	I	石鏃	黒曜石	(3.7)	1.5	0.4	(1.5)		
	3	#	N-42	3	Ⅳ	石鏃	頁岩	3.4	1.4	0.3	1.2		
	4	#	J-30	1	Ⅲ	石鏃	頁岩	2.8	1.7	0.3	1.2		
	5	#	O-40	3	耕作土	石鏃	頁岩	3.4	2.1	0.4	(2.2)		
	6	#	J-23	1	Ⅱ	石鏃	頁岩	(3.2)	1.2	0.2	(1.1)		
	7	#	P-45	3	I	石鏃	頁岩	(3.8)	1.6	0.7	(3.4)		
	8	#	M-31	1	Ⅲ	石鏃	黒曜石	(2.3)	1.4	0.4	(1.1)		
	9	#	O-26	6	I	石鏃	頁岩	(2.6)	1.2	0.4	(1.2)		
	10	#	M-27	7	Ⅱ	石鏃	頁岩	(3.4)	1.0	0.5	(1.5)		
	11	#	M-38	2	耕作土	石鏃	頁岩	(3.2)	(1.9)	0.4	(1.2)		
	12	#	P-25	1	擾乱	石鏃	流紋岩	(3.3)	1.6	0.6	(3.4)		
	13	#	H-33	6	Ⅲ	石匙	頁岩	6.1	2.5	0.7	7.8		
	14	#	N-51	1	Ⅱ	石匙	頁岩	6.1	2.3	0.7	8.0		
	15	#	J-40	1	Ⅱ	石匙	頁岩	7.3	3.3	0.7	13.8		
	16	#	N-50	1	Ⅲ	石匙	頁岩	(6.7)	2.4	0.6	(11.5)		
	17	#	O-33	6	Ⅲ	石匙	頁岩	5.4	3.1	0.6	8.9		
	18	#	M-20	2	Ⅲ	石匙	頁岩	5.2	5.7	0.6	10.4		
	19	#	L-32	1	Ⅱ	石匙	頁岩	(5.9)	4.5	1.0	(29.1)		
	20	#	N-32	4	Ⅲ	石匙	頁岩	(6.4)	3.0	1.1	(23.1)		
21	#	O-46	5	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	7.1	3.3	0.8	11.6			
22	#	M-45	3	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	(7.3)	(7.1)	1.6	(76.6)			
V-14	23	#	P-29	1	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	10.0	4.4	1.2	50.7		
	24	#	T-55	8	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	8.8	8.2	1.6	104.3		
	25	#	P-27	3	Ⅱ	スタレイバー	頁岩	6.8	(6.0)	1.4	(48.9)		
	26	#	I-36	1	Ⅱ	スタレイバー	頁岩	7.2	5.1	1.1	45.6		
	27	#	R-34	1	耕作土	スタレイバー	頁岩	4.7	3.0	0.7	(10.6)		
	28	#	P-43	22	擾乱	スタレイバー	頁岩	5.5	3.8	1.0	16.4		
	29	#	K-51	2	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	6.1	(4.5)	1.2	(20.0)		
	30	#	M-31	2	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	4.7	(5.6)	1.3	(21.5)		
	31	#	J-33	2	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	4.8	6.7	0.9	14.4		
	32	#	I-40	5	Ⅲ	スタレイバー	頁岩	(9.9)	(3.8)	2.1	(26.6)		
	V-15	33	19	I-26	8	擾乱	磨製石斧	泥岩	(7.6)	6.4	3.4	(287.3)	
		34	#	H-42	7	Ⅲ	磨製石斧	不明	(4.7)	(6.7)	(2.5)	(64.4)	
35		#	N-45	3	Ⅱ	磨製石斧	片岩	(5.6)	4.8	(1.3)	(53.3)		
36		#	#	1	表面採集	磨製石斧	泥岩	(7.4)	5.7	2.2	(157.1)		
37		#	O-20	2	Ⅲ	磨製石斧	泥岩	(3.7)	(4.9)	(2.0)	(43.6)		
38		#	K-20	1	Ⅱ	磨製石斧	泥岩	(8.2)	(4.6)	3.0	(165.0)		
39		#	H-29	6	Ⅲ	たたく石	砂岩	6.7	10.5	5.5	540.0		
40		#	M-27	10	Ⅱ	たたく石	砂岩	12.8	7.9	4.0	580.0		
41		#	P-50	2	Ⅲ	すり石	砂岩	9.1	15.0	5.4	820.0		
V-16		42	#	Q-25	3	I	加工後のある礫	流紋岩	11.0	17.4	4.4	1180.0	
		43	#	R-43	2	I	加工後のある礫	砂岩	7.6	15.2	4.2	520.0	
		44	#	I-33	6	Ⅱ	加工後のある礫	砂岩	15.4	22.6	(6.9)	(2920.0)	
		45	#	M-46	3	Ⅱ	砥石	凝灰岩	8.0	14.9	4.2	490.0	2点接合
	46	#	M-45	10	Ⅳ	石皿	砂岩	(8.1)	(11.7)	(5.0)	(440.0)		
	47	#	J-30	2	Ⅲ	台石	砂岩	20.0	(13.3)	6.1	(2330.0)		
	48	#	M-28	8	I	鉄弾	鉛	2.60	1.39	1.38	31.4		
	49	#	H-27	3	I	鉄弾	鉛	2.54	1.49	1.49	33.0		
	50	#	L-22	2	擾乱	鉄弾	鉛	2.31	1.48	1.45	27.9		

## Ⅵ 総 括

### 1 矢不來 8 遺跡

平成17・18年度の二次にわたって、6,278㎡が調査された。遺構は竪穴住居跡 2 軒、土坑10基、焼土 5 か所、埋設土器 1 基、土器埋設炉 1 か所、土器破片集中 1 か所、碟集中 1 か所、柱穴様の小土坑16か所、遺物は土器類12,554点、石器類1,644点を数える。調査区の東側と南側では主体となる時期が異なり、前者では縄文時代晩期中葉、後者では縄文時代中期後半から後期前葉の遺構・遺物が多い。さきに刊行された報告書（北埋調報234）と重複する部分もあるが、本節では主立ったものについて取り上げておく。

**調査区東側** おおよそ41ラインより東側である。南へ緩く傾斜する地形で、標高は63m前後を測る。

**遺構** 縄文時代晩期中葉の埋設土器（BP 1）、土器埋設炉（BP 2）をはじめ、同時期とみられる土坑 1 基（P 10）、焼土 1 か所（F 5）、碟集中 1 か所（CS 1）がある。

BP 1 には壺が埋設されており、すぐ南側でP10が検出された。BP 2 は、埋設された深鉢に焼土と炭化材が伴っていたものである。深鉢には、埋設以前の使用痕が顕著に認められた。

**包含層出土の遺物** 土器はⅤ群が大半で、2,151点を数える。口縁部には、数条の沈線間に刻みが付けられたものが多い。彫刻的な磨消縄文を特徴とする大洞C<sub>1</sub>式も出土していることから、調査区東側のⅤ群は、木古内町札道遺跡の札道Ⅰ群、函館市日吉町 1 遺跡の資料に相当する縄文時代晩期中葉のものが主体であろう。

石器で特徴的なものとして、撚形を呈する大型の石筥が出土している。

**調査区南側** おおよそ0ラインより南側で、東側には沢の源流部がある。南東へ延びる台地の始まる部分にあたり、平坦部の標高は59mを測る。

**遺構** 竪穴住居跡 2 軒（H 1・2）、土坑 9 基（P 1～9）、焼土 4 か所（F 1～3・5）、土器破片集中 1 か所（CP 1）、柱穴様の小土坑16か所（SP 1～16）がある。

H 1・2とも調査区外の部分があり、全体は調査できなかった。H 1 は、床面からⅢ群b類と判断される土器が得られたことなどから、縄文時代中期後半の時期と推測される。H 2 はごく一部の調査であり時期の推測は困難であるが、他の遺構や周囲の遺物出土状況からすると、縄文時代中期後半から後期前葉の可能性がある。SP 1～16についても同様である。

土坑はP 1～7・9が近接している。形態と規模の類似性によって、P 1・3・5・7・9とP 2・4・6の二群に分けられる。前者は坑底面の一部が確認面より張り出し、坑底面の径が概ね70cm前後、後者は坑底面が確認面より一回り小さく、坑底面の径が概ね90cm前後である。P 4・7を除き、坑底面近くから碟が出土している。P 3とP 4に伴う土器から、両群とも縄文時代中期後半のものと考えられる。

F 1～3・5は、周囲の遺物出土状況から、いずれも縄文時代後期前葉のものであろう。

CP 1 は続縄文時代、恵山式の土器破片がまとまって出土したものである。壺と深鉢に復原され、どちらもアヨロ1b類もしくは2a類に相当する。

**包含層出土の遺物** 土器はⅣ群が大半で、9,000点を数える。条が横走、縦走、羽状のものもあるが、L・R原体を縦回転させた斜行縄文が多い。この他、タガ状の貼付帯、縄線文、ボタン状貼付文、円形刺突文、沈線文などが見られ、折り返し状の口縁もある。これらの特徴から調査区南側のⅣ群土器は、縄文時代後期前葉の天祐寺式、涌元Ⅰ式等に相当するものが主体であろう。胴部が沈線で三角形に区画された、涌元Ⅱ式との関連をうかがわせるもの（図Ⅳ-5-4）は少ない。

石器の多くは、出土状況からみて縄文時代後期前葉のものと考えられる。スクレイパーとたたき石が多い。なお、2か年度とも石匙は出土していない。(山中文雄)

## 2 矢不來10遺跡

7,607㎡が調査された。遺構はTピット(TP1)1基、遺物の集中地点として、土器破片集中(CP1)、フレイク・チップ集中(CF1)、礫集中(CS1)がある。遺物は土器類1,061点、石器類1,595点を数える。この他、箱館戦争時のものとみられる鉛製の銃弾7点がある。

**遺構** TP1は、標高約67mの平坦部で検出された。調査区内では比較的高い部分にあたる。形態は長径約2.7mの溝状で、底面に杭痕などはみられない。周辺の遺跡では、館野4遺跡で7基(北理調報235)、館野遺跡で7基(北理調報237)、矢不來館跡付近のNo.12トレンチで1基(上磯町教育委員会2001)のTピットが報告されている。館野4遺跡のTピットを見ると、溝状で長径2m以上のものが2基、2m未満のものが5基あり、本遺跡のTP1は前者に近い形態である。

**包含層出土の遺物** 土器のうち、およそ半数がIV群である。口縁部破片を見ると、折り返し状の口縁や、縄線文が見られ、胴部では網目状襷糸文、円形刺突文の施されるものがあることから、IV群の中でも縄文時代後期前葉の涌元I式に含まれるものが主体とみなされる。この他、CP1として取り上げた破片により、深鉢の底部から胴部が復原されている(図V-3-1)。刻み列が付けられていないことから、縄文時代後期中葉の手桶式に相当する資料であろう。

I群はIV群に次いで多い。微隆起線文等の特徴から、縄文時代早期後半の中茶路式に相当する。V群で図示したものは、横位連続工字文が施されることから、縄文時代晩期後葉の聖山II式に相当する。

石器の多くは所属時期が不明であるものの、CF1として取り上げた石匙やフレイクは、検出された層位と周囲の遺物から、縄文時代早期後半の可能性がある。CF1の石匙は幅広ではあるが、遠端部の縁辺が直線的もしくは切出し形を呈する。このような形態の石匙は、図示した5点(図V-13-13~17)を含め9点出土している。縄文時代早期後半を主体とする函館市の西枯梗1遺跡(北理調報99)、豊原2遺跡(函館市教育委員会1994)では石匙が多く出土しており、本遺跡と似通った形態のものも図示されている。CF1の時期、I群土器との分布の類似、時期が同じである他遺跡の出土例を考え合わせると、本遺跡の石匙のうち上述した9点は、縄文時代早期後半のものだと判断してよいかもれない。

鉛製の銃弾7点は、いずれも椎実形の底部をくぼめたものである。形態と計測値が類似する銃弾は、五稜郭跡(国指定特別史跡)の遺物中にも多く見られ、明治2(1869)年の箱館戦争時の前装式施条弾(エンフィールド銃用)と考えられている(函館市教育委員会1990・2006)。本遺跡の銃弾についても、五稜郭跡のものに類似することや、矢不來において旧幕府脱走軍と官軍との交戦が記されていることから(大島1998)、箱館戦争時のものと判断される。

なお、矢不來地区の遺跡では類似の銃弾が、茂別遺跡(北理調報121)、矢不來6遺跡(北理調報235)、矢不來11遺跡(北理調報235)でそれぞれ1点、矢不來天満宮跡で2点(北理調報47)報告されており、本遺跡の7点と合わせて12点を数える。(山中文雄)

## 引用・参考文献

### 論文・書籍等

- 上磯町史編纂委員会 1917 「茂別郷土誌」 上磯町史資料集第二集
- 河野常吉 1924 「北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書」
- 太政官編纂 1930 「復古記」第14冊 内外書籍
- 馬場 修 1932 「北方郷土」 函館郷土研究会
- 千代 肇 1960 「魚形石器の考察」 『貝塚』100
- 千代 肇・落合治彦 1963 「北海道上磯町浜山遺跡調査略報」 『北海道の文化』特集号
- 永田富智 1966 「道南十二館の史的考察」 『新しい道史』第18号
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 「新版 標準土色帖」2004年版 日本色研事業株式会社
- 大山 柏 1968 「戊辰役戦史」 時事通信社
- 武内収太 1968 「箱館戦争」 五稜郭タワー
- 田端 宏 1975 「渡島國戦争日誌」『松前藩と松前』7号 松前町史編集室
- 藤本英夫編 1980 「日本城郭大系1 北海道・沖縄」 新人物往来社
- 吉崎昌一 1982 「下浜山遺跡」 『北海道における農耕の起源(予報)』
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」 『北海道考古学』第20輯
- 永田方正 1984 「初版 北海道蝦夷地地名復刻版」 草風館
- 山田秀三 1984 「北海道の地名」 北海道新聞社
- 大沼忠春 1986 「施文原体の変遷 - 東釧路式土器 -」 『季刊考古学』第17号
- 大島圭介、今井信郎 1998 「南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記」 新人物往来社
- 設楽博己編 2001 「落合計策縄文時代遺物コレクション」 国立歴史民俗博物館
- 鈴木克彦 2001 「北日本の縄文後期土器編年の研究」 雄山閣
- 野村 崇・宇田川洋共編 2001 「新北海道の古代1 旧石器・縄文文化」 北海道新聞社
- 森 靖裕 2002 「北海道・上磯町の中世館跡と近世台場跡」 『日本歴史』2002年5月号 吉川弘文館
- 所 荘吉 2006 「新版 図解古銃事典」 雄山閣

### 団体・組織刊行物

- 上磯町 1997 「上磯町史 上巻」 上磯町
- 知内町教育委員会 1986 「幕末の知内」 『知内町史』
- 日本ペドロジー学会 1997 「土壌調査ハンドブック 改訂版」 博友社
- 地学団体研究会道南班 2002 「道南の自然を歩く 改訂版」 北海道大学図書刊行会
- 国立歴史民俗博物館 2006 「歴史のなかの鉄炮伝来」 財団法人歴史民俗博物館振興会

### 埋蔵文化財発掘調査報告書

- 木古内町教育委員会 1974 「札笥遺跡」
- 北海道文化財保護協会 1978 「函館市・日吉町1遺跡」
- 知内町教育委員会 1979 「知内川中流域の縄文時代遺跡 北海道上磯郡知内町湯の里1遺跡発掘調査報告書」
- 七飯町教育委員会 1979 「峠下聖山遺跡」
- 上磯町教育委員会 1981 「館野2遺跡」
- 上磯町教育委員会 1983 「浜山」
- 北海道教育委員会 1984 「昭和58年度 渡島地区遺跡分布特別調査報告書」

- 苫小牧市教育委員会 1986 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ」
- 上磯町教育委員会 1988 「富川砲臺跡」
- 上磯町教育委員会 1990 a 「三ツ石遺跡」
- 上磯町教育委員会 1990 b 「矢不來 3 遺跡」
- 函館市教育委員会 1990 「特別史跡 五稜郭跡 箱館奉行所跡発掘調査報告書」
- 上磯町教育委員会 1992 a 「石倉野 3 遺跡」
- 上磯町教育委員会 1992 b 「三ツ石 2 遺跡」
- 上磯町教育委員会 1993 「フコマ野遺跡・フコマ野 2 遺跡」
- 戸井町教育委員会 1993 「戸井貝塚Ⅲ」
- 戸井町教育委員会 1994 「戸井貝塚Ⅳ」
- 函館市教育委員会 1994 「豊原 2 遺跡」
- 上磯町教育委員会 1998 「フコマ野遺跡」
- 上磯町教育委員会 2001 「町内遺跡発掘調査事業報告書－平成11・12年度発掘調査概要報告－」
- 上磯町教育委員会 2003 「押上 1 遺跡」
- 上磯町教育委員会 2004 「押上 1 遺跡」
- 上磯町教育委員会 2005 「押上 1 遺跡」
- 北斗市教育委員会 2006 「押上 1 遺跡」
- 函館市教育委員会 2006 「特別史跡 五稜郭跡 箱館奉行所跡発掘調査報告書」

**財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）**

- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1986 「湯の里 3 遺跡」 北埋調報32
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1986 「木古内町 建川 1・新道 4 遺跡」 北埋調報33
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1986 「上磯町 矢不來 2 遺跡」 北埋調報37
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1987 「上磯町 矢不來天満宮跡」 北埋調報47
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1988 「木古内町 新道 4 遺跡」 北埋調報52
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 1998 「上磯町 茂別遺跡」 北埋調報121
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2002 「八雲町 野田生 4 遺跡」 北埋調報171
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2004 「千歳市 オルイカ 1 遺跡（2）」 北埋調報206
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2004 「森町 湯川左岸遺跡－A地区－」 北埋調報208
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2006 「北斗市 矢不來 7 遺跡・矢不來 8 遺跡」 北埋調報232
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2006 「北斗市 矢不來 6 遺跡・矢不來 11 遺跡・館野 4 遺跡」 北埋調報235
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 2007 「北斗市 館野遺跡（1）」 北埋調報237

## 写真図版

図版1～11 矢不來8遺跡

図版12～19 矢不來10遺跡

## 撮影機材情報

### 現場

#### カメラ

マミヤ RZ67PRO II

酒井マシントール トヨフィールド45A

ニコン F3

#### レンズ

セイコー マミヤセコール90mmF3.5W

セイコー マミヤセコール-M65mmF4L-A

セイコー マミヤセコール-50mmF4.5W

富士フィルム フジノン90mmF8

富士フィルム フジノンW135mmF5.6

富士フィルム フジノンW180mmF5.6

ニコン AiAFズームニッコール35-70mmF2.8D

ニコン Aiニッコール24mmF2.8s

#### 三脚

クイックセット ハスキー4段

#### フィルム

富士フィルム RDP III

富士フィルム ネオパン100アクロス

コダック E100G

コダック TMX

#### その他

グレッタグマクベス カラーチャート

コダック グレーカード

### 室内

#### カメラ

酒井マシントール トヨビュー-45GX

#### レンズ

ニコン ニッコールW210mmF5.6

#### 撮影台

酒井マシントール 無影撮影台

酒井マシントール カメラスタンド101

#### ストロボ

コメット CB-2400a CLX-25miniH CL25H

#### フィルム

コダック E100G

コダック TMX





1 調査開始面

東から



2 H2覆土

北西から



1 H 2 炭化木片出土状況

北西から



2 H 2 完掘

西から



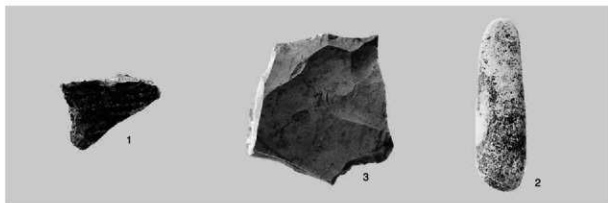
3 H 2 HP1 覆土

西から

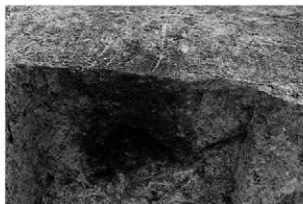


4 SP14 覆土

西から



1 H 2 出土の遺物



2 SP15覆土

北から



3 遺物出土状況(Q-16区) 南西から



4 遺物出土状況(T-17区)

南東から



1 調査終了面（道路以北）

東から



2 調査終了面（道路以南）

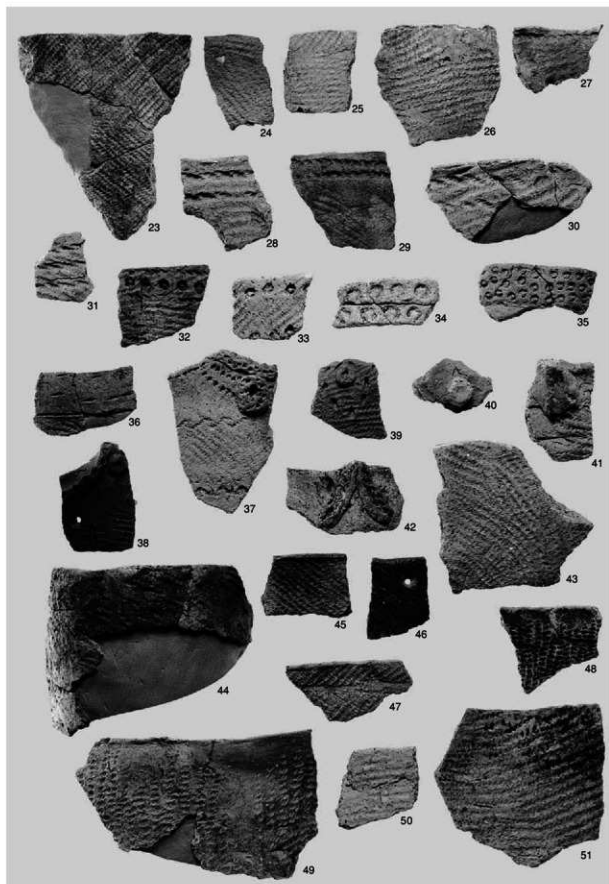
西から



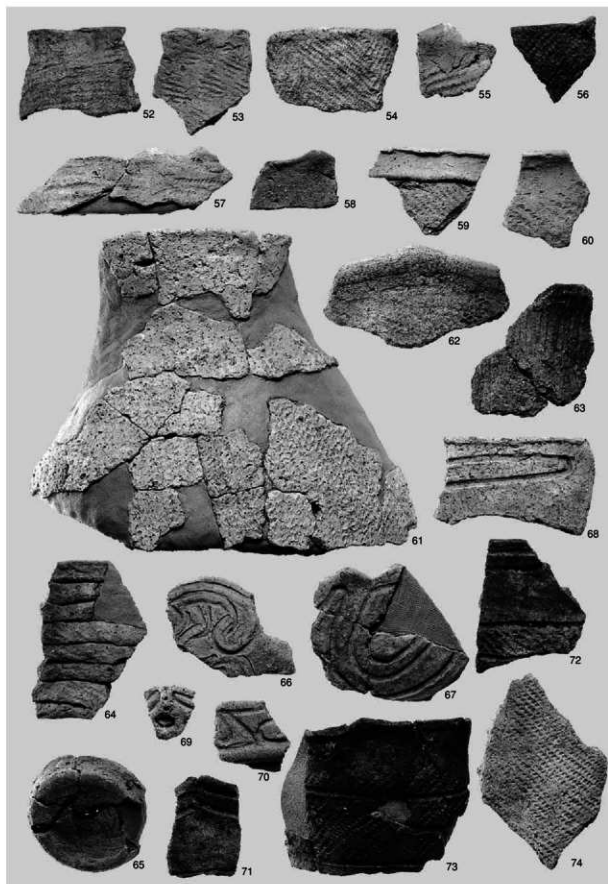
包含層出土の土器 (1)



包含層出土の土器（2）

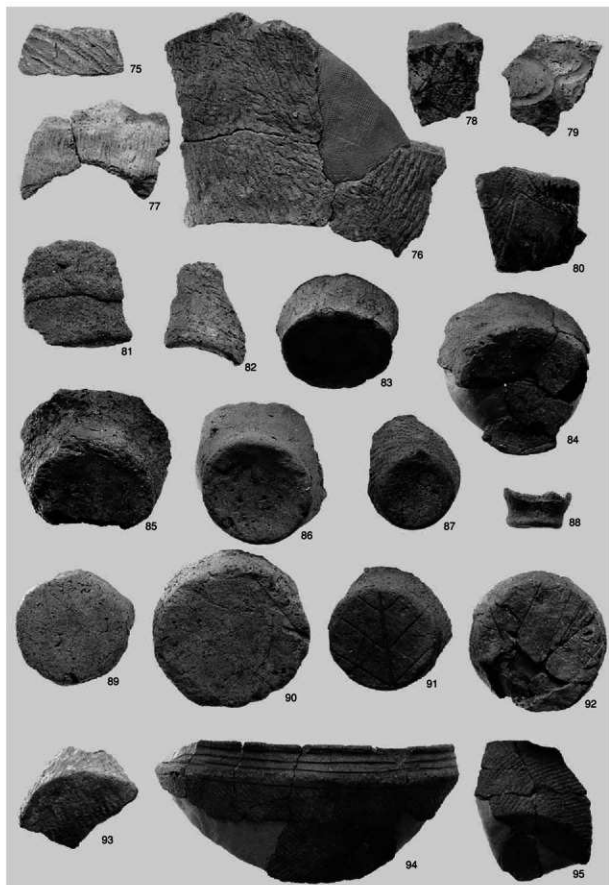


包含層出土の土器 (3)

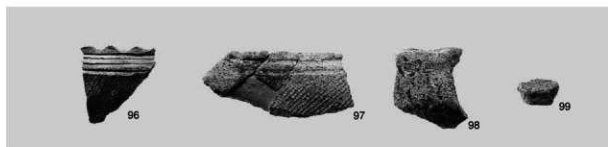


包含層出土の土器（4）

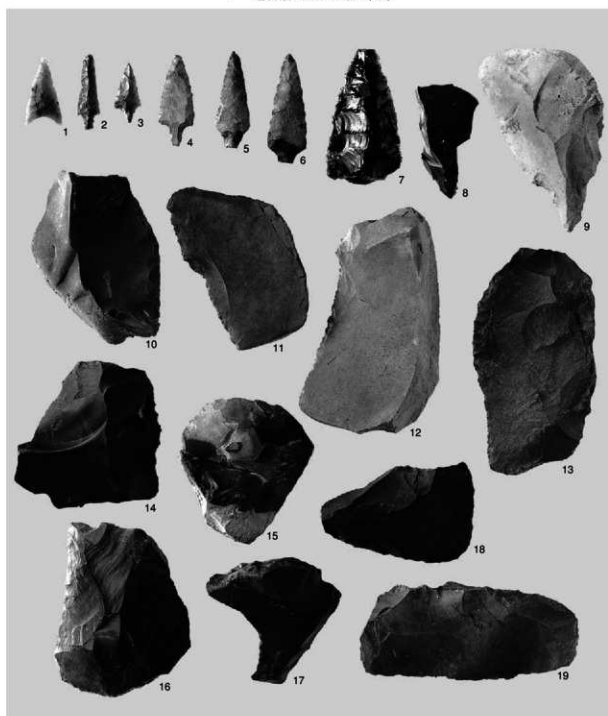




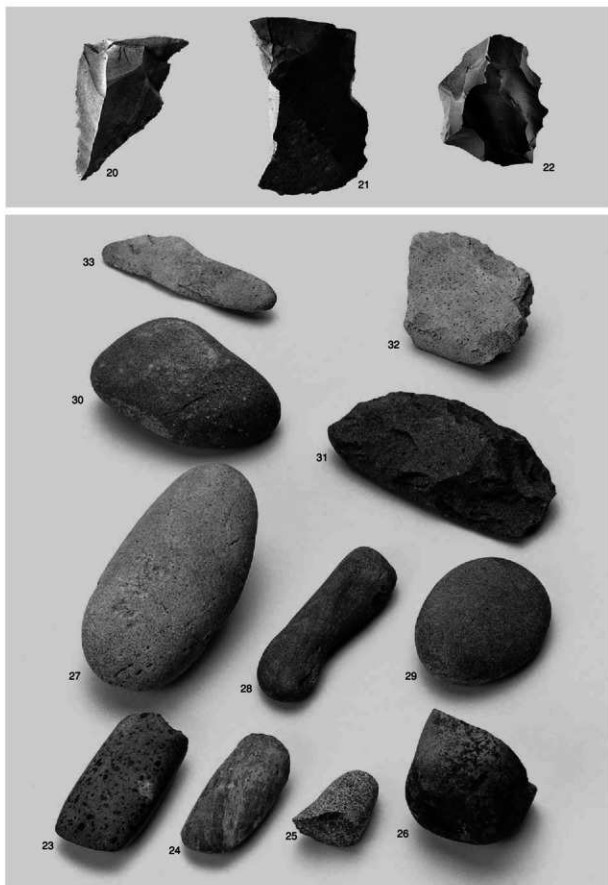
包含層出土の土器 (5)



1 包含層出土の土器（6）



2 包含層出土の石器（1）



包含層出土の石器（2）



1 調査開始面（中央地区南側）

南西から



2 調査開始面（中央地区北側）

南西から



1 調査開始面（東地区北側）

西から



2 TP1覆土 北東から



3 TP1完掘 北東から



1 CP 1 東から



2 CS 1 (1) 南東から



3 CS 1 (2) 東から



4 発掘作業状況 (I層) 南東から



5 調査開始面 (遺構確認調査区) 南東から



1 調査終了面 (遺構確認調査区)

南西から



2 調査終了面 (西地区)

北東から



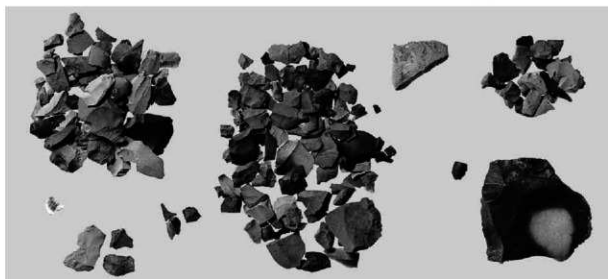
1 CP 1 出土の遺物



2 CF 1 出土の遺物 (1)



3 金属製品

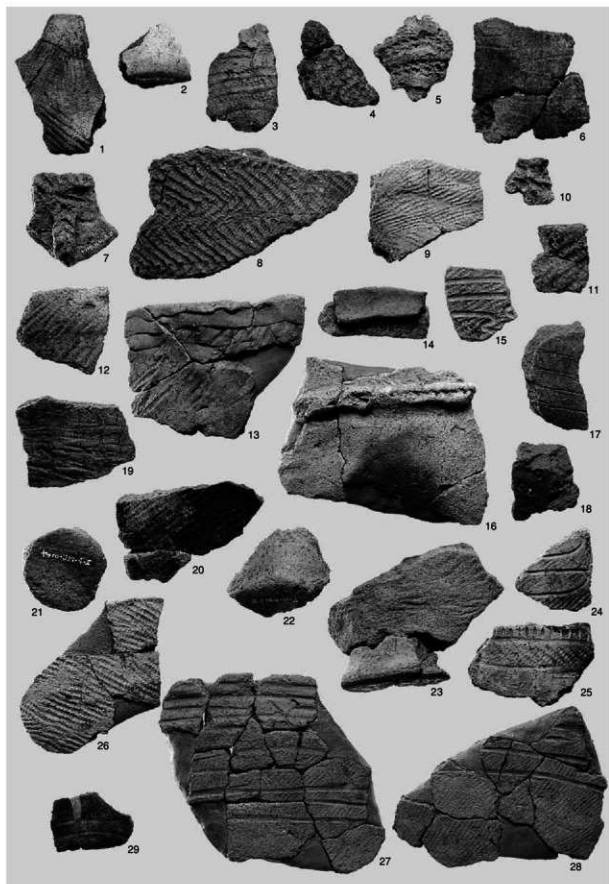


4 CF 1 出土の遺物 (2)

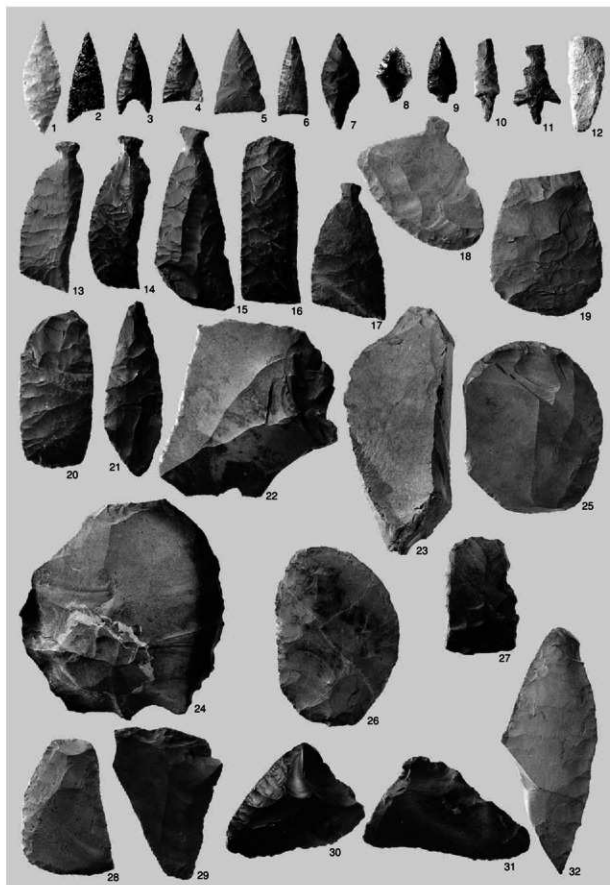


5 CS 1 出土の遺物





包含層出土の土器（1）



包含層出土の石器（1）



包含層出土の石器（2）・金属製品



# 報告書抄録

ふりがな	ほくとし やふらい8いせき (2) やふらい10いせき
書名	北斗市 矢不來8遺跡 (2) ・矢不來10遺跡
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)
シリーズ番号	第244集
編著者名	佐川俊一・中山昭大・山中文雄
編集機関	(財) 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231
発行年月日	西暦2007年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やふらい8いせき 矢不來8遺跡	ほっかいどうほくとし 北海道北斗市 やふらい 矢不來437-3ほか	1335	B-06-74	41° 46' 34"	140° 36' 03"	20061003 ～ 20061027	82㎡	道路建設 (高規格幹線 道路函館江差 自動車道建設 工事)に伴う 事前調査
やふらい10いせき 矢不來10遺跡	ほっかいどうほくとし 北海道北斗市 やふらい 矢不來234ほか	1335	B-06-76	41° 46' 43"	140° 36' 24"	20060710 ～ 20061027	7,607㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢不來8遺跡	遺物 包含地	縄文時代 中期・ 後期・ 晩期	竪穴住居跡 (1) 焼土 (1) 柱穴様小土坑 (3)	土器類 (7,556点) 石器類 (1,644点)	
矢不來10遺跡	遺物 包含地	縄文時代 早期・ 後期・ 晩期	Tピット (1) 土器破片集中 (1) フレイク・チップ 集中 (1) 礫集中 (1)	土器類 (1,061点) 石器類 (1,595点) 金属製品 (7点)	

◎北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第244集

## 北斗市 矢不來 8 遺跡 (2)・矢不來10遺跡

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19(2007)年3月27日

**編集・発行** 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1  
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238  
URL <http://www.domaibun.or.jp/>  
Email [mail@domaibun.or.jp](mailto:mail@domaibun.or.jp)

**印刷** 札幌大同印刷株式会社  
〒004-0003 札幌市厚別区厚別東3条2丁目1-1  
TEL (011)897-9711(代) FAX (011)897-9715